

南島原市文化財調査報告書 第33集

大崎鼻遺跡

—市道南島原自転車道線整備工事に伴う発掘調査—

2023

長崎県南島原市教育委員会

南島原市文化財調査報告書 第33集

大崎鼻遺跡

—市道南島原自転車道線整備工事に伴う発掘調査—

2023

長崎県南島原市教育委員会

発刊にあたって

本書は、長崎県南島原市布津町大崎に所在する大崎鼻遺跡の発掘調査報告書です。大崎鼻遺跡は、地理的にみると島原半島を東西に走る雲仙地溝帯のうち南縁断層帯を構成している布津断層の急崖の上に立地しています。遺跡から眺望できる有明海から大きく湾入した入り江、普賢岳や平成新山、眉山など雲仙の山並み、それらが織りなす風景は、島原半島随一の絶景と呼ぶにふさわしいものです。

今回の発掘調査は、南島原市が事業主体となって進めている市道南島原自転車道線整備工事に伴って実施いたしました。整備工事は、島原鉄道跡地の約32kmを自転車歩行者専用道路として活用する計画となっています。発掘調査では、縄文時代早期、縄文時代後・晚期、弥生時代中期、中世の豊富な遺物が出土し、また中世のものと思われる複数の溝も確認いたしました。

私たちは、発掘調査によって知り得たこうした埋蔵文化財を地域の貴重な宝として後世に伝えていく責任があると考えます。学校教育や生涯教育など広く活用の機会を増やすとともに、学術文化の向上に寄与するものとなるよう適切に保護し、研究を深めていきたいと存じます。

末筆になりましたが、発掘調査を実施するにあたりご理解とご協力を賜りました地元にお住まいの皆様、事業部局と工事関係の方々、発掘調査と整理調査に従事いただきました作業員の方々、そのほか関係各位に心より感謝申し上げ、発刊のあいさつといたします。

令和5年3月31日

南島原市教育委員会
教育長 松本 弘明

例　　言

- 1 本書は、大崎鼻遺跡（長崎県南島原市布津町大崎所在）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、南島原市建設部建設課が事業主体である市道南島原自転車道線整備工事に伴って実施した。
- 3 現地調査及び整理調査は、南島原市教育委員会が主体となって実施した。調査の体制・担当は、以下のとおりである。

調査主体

南島原市教育委員会	教　育　長	永田　良二（～令和3年8月）
同　　上		松本　弘明（令和3年8月～）
教育次長		栗田　一政（～令和4年3月）
同　　上		五島　裕一（令和4年4月～）
文化財課長		岡野　博明（～令和4年3月）
同　　上		中村　隆敏（令和4年4月～）
文化財課文化財班長		梶原　知治

調査担当（現地調査・整理調査）

南島原市教育委員会 文化財課文化財班　　副参事（学芸員） 本多 和典

- 4 現地調査における個別遺構実測図の作成は、安達朋之、島田亮子、富田順平、本村加奈子が行った。写真撮影は、本多が行った。遺構配置図、土層図の作成、航空写真的撮影は、（株）埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した。
- 5 整理調査及び本書作成にあたって、細波泉、下田金衛、飛永弘恵、横田香織の協力を得た。
- 6 遺物の実測は、本多が主に行い、石器の一部については、（株）埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した。遺物実測図の製図は、細波、横田が行った。遺構配置図及び土層図の製図は、（株）埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した。本書掲載の遺物写真的撮影は、本多が行った。
- 7 本書に関する遺物、図面、写真等は、南島原市深江埋蔵文化財整理室に保管している。
- 8 本書の執筆・編集は、本多による。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	1
第Ⅱ章 範囲確認調査	2
第Ⅲ章 本調査	5
第Ⅳ章 まとめ	34

挿図目次

第1図 大崎鼻遺跡位置図 (S = 1 / 200,000)	1
第2図 範囲確認調査調査坑配置図 (S = 1 / 2,500)	3
第3図 範囲確認調査調査坑土層実測図 (S = 1 / 40)	4
第4図 本調査区IV層上面遺構配置図【全体】(S = 1 / 600)	6
第5図 本調査区東壁土層図 (S = 1 / 80)	7 ~ 8
第6図 本調査区IV層上面遺構配置図【部分①】(S = 1 / 200)	9
第7図 本調査区IV層上面遺構配置図【部分②】(S = 1 / 200)	10
第8図 本調査区IV層上面遺構配置図【部分③】(S = 1 / 200)	11
第9図 本調査区IV層上面検出溝断面実測図 (S = 1 / 20)	14
第10図 出土土器ほか実測図① (S = 1 / 3)	15
第11図 出土土器ほか実測図② (S = 1 / 3)	16
第12図 出土土器ほか実測図③ (S = 1 / 3)	17
第13図 出土土器ほか実測図④ (S = 1 / 3)	19
第14図 出土土器ほか実測図⑤ (S = 1 / 3)	20
第15図 出土土器ほか実測図⑥ (S = 1 / 3)	21
第16図 出土石器実測図① (1 ~ 7 : S = 2 / 3, 8 : S = 1 / 2)	26
第17図 出土石器実測図② (S = 1 / 2)	27
第18図 出土石器実測図③ (S = 1 / 2)	28
第19図 出土石器実測図④ (S = 1 / 2)	29
第20図 出土石器実測図⑤ (S = 1 / 3)	30
第21図 出土石器実測図⑥ (S = 1 / 3)	31
第22図 出土石器実測図⑦ (38 ~ 44 : S = 1 / 3, 45 ~ 47 : S = 2 / 3)	32

表目次

第1表 出土土器ほか観察表①	22
第2表 出土土器ほか観察表②	23
第3表 出土土器ほか観察表③	24
第4表 出土石器観察表	33

図版目次

図版1 航空写真①	37
図版2 航空写真②	38
図版3 航空写真③	39
図版4 航空写真④	40
図版5 航空写真⑤	41
図版6 範囲確認調査	42
図版7 本調査区土層堆積状況①	43
図版8 本調査区土層堆積状況②	44
図版9 本調査区IV層上面遺構検出状況①	45
図版10 本調査区IV層上面遺構検出状況②	46
図版11 本調査区IV層上面溝検出状況①	47
図版12 本調査区IV層上面溝検出状況②	48
図版13 本調査区IV層上面検出溝堆積状況①	49
図版14 本調査区IV層上面検出溝堆積状況②	50
図版15 出土土器ほか①	51
図版16 出土土器ほか②	52
図版17 出土土器ほか③	53
図版18 出土土器ほか④	54
図版19 出土土器ほか⑤	55
図版20 出土石器①	56
図版21 出土石器②	57
図版22 出土石器③	58
図版23 出土石器④	59
図版24 出土石器⑤	60
図版25 出土石器⑥	61

第Ⅰ章 はじめに

大崎鼻遺跡が所在する長崎県南島原市布津町大崎は、島原半島の東部に、市域としては南島原市の北部に位置する。島原半島には、中央に平成新山（標高1,483m）を主峰に、普賢岳（標高1,359m）、国見岳（標高1,347m）、妙見岳（標高1,333m）などといった雲仙の山々がそびえ、周間にすそ野を広げている。半島の西は橘湾と、北東から南東にかけては有明海と海岸線をつくる。遺跡は雲仙断層群を構成する布津断層の断層崖上に展開しており、遺跡の北は断層活動の影響で大きく有明海の海岸が湾入していて、特徴的な遺跡の立地となっている。

歴史的な環境として市内の周辺遺跡をみてみる。縄文時代の遺跡では、早期の押型文土器が多数出土した下末宝遺跡（深江町）がある。弥生時代では、突帯文期の遺跡として「山ノ寺式土器」の標識遺跡として知られる山ノ寺櫛木遺跡（深江町）、成人土坑墓と小児土器棺墓の墓域が検出された権現脇遺跡（深江町）、国内最大規模の支石墓群として知られる国史跡原山支石墓群（北有馬町）がある。また、北岡金比羅祀遺跡（南有馬町）では明治期に中期の合口甕棺が発見されており、銅剣1本を副葬していたと伝わる。古墳時代では天ヶ瀬古墳（布津町）がある。すでに墳丘は失われているが後期の円墳と考えられ、横穴式石室が現在も残る。古代の遺跡はほとんど知られていない。中世期に入ると、キリシタン大名有馬氏の居城である国史跡日野江城跡（北有馬町）がある。階段造構の検出や金箔瓦、法花などの出土がある。近世期では、島原・天草一揆の主戦場となった国史跡原城跡が知られ、多数のキリシタン遺物や犠牲となった人々の人骨などが出土している。2018年には「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産として、ユネスコ世界文化遺産に登録されている。



第1図 大崎鼻遺跡位置図 (S = 1/200,000)

第Ⅱ章 範囲確認調査

南島原市建設部建設課自転車道路整備班により市道南島原自転車道線が計画された。計画は市内を有明海沿いに走っていた島原鉄道南目線（平成20年4月1日廃線）の跡地を整備し、自転車歩行者専用道路として活用するもので、その延長は約32.1kmである。

この計画を受けて南島原市教育委員会文化財課は、鉄道跡地の現地確認を行い、周知の埋蔵文化財包蔵地とその周辺について、試掘・範囲確認調査を実施し、その結果に応じて本調査を実施することとした。なお、現地踏査の時点で舌状の丘陵地が鉄道敷設によって切り通されていて遺跡の残存が望めないような現況の場合は、試掘・範囲確認調査の対象から除外した。試掘・範囲確認調査を実施した遺跡は、二本櫛遺跡（深江町）、大崎鼻遺跡（布津町）、町村遺跡（有家町）、北岡金比羅祀遺跡（南有馬町）、永瀬貝塚（加津佐町）の5遺跡である。

大崎鼻遺跡における範囲確認調査は、令和3年8月24日から令和3年8月31日の期間において、平面2m四方の調査坑を5箇所設定し、計20m²の調査を行った。なお、こんびら公園沿いの部分については、鉄道敷設時に大きく切り通しが行われており、遺跡の残存は望めないと判断されたことから、調査坑の設定は行っていない。

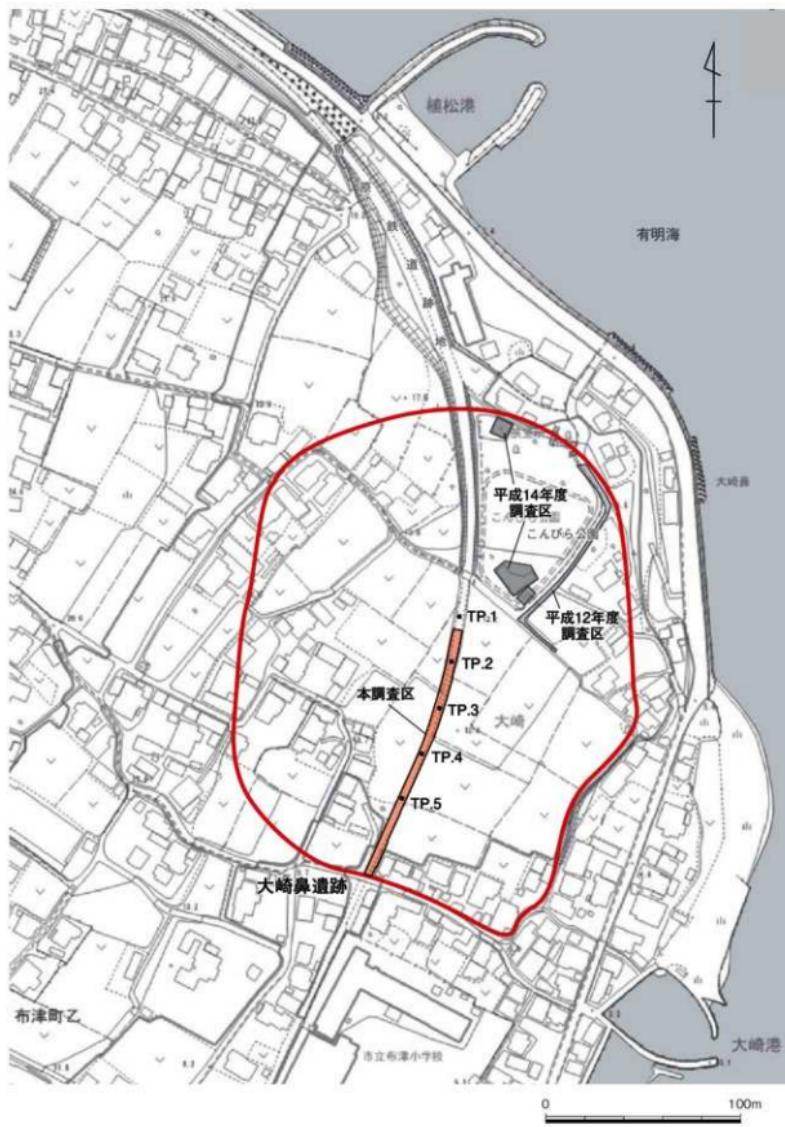
調査は、調査坑の設定を行ったのち、重機によって線路の道床である砂利層と表土層を除去し、その後人力によって層位ごとに掘削を行った。掘削途中、必要に応じて遺構・遺物の検出状況や作業状況の写真撮影を行った。また、完掘した段階で、壁面の土層実測図作成と写真撮影を行った。埋め戻しには重機を用いた。

今回の大崎鼻遺跡における範囲確認調査の基本土層は、以下の通りである。

- I 層 暗灰黄色土。旧耕作土。
- II 層 灰オリーブ土。
- III 層 黒褐色土。古墳時代～中世の遺物包含層。
- IV 層 にぶい黄褐色土。縄文時代晩期の遺物包含層。
- V 層 にぶい黄褐色土。にぶい黄橙色の2cm大の生痕多数あり。
- VI 層 灰黄褐色粘質土。5mm大以下の礫をわずかに含む。
- VII 層 黑褐色土。1cm大以下の風化白色礫を多く含む。
- VIII 層 黑褐色土。締まりが強く、クラックが入る。
- IX 層 黑褐色粘質土。50cm大以下の亜角礫を含む。
- X 層 明黄褐色粘質土。砂粒を含む。
- XI 層 明黄褐色粘土。

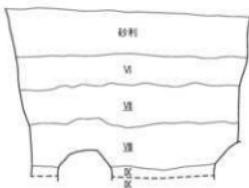
※VII層～IX層とX層・XI層の先後関係は不明

調査の結果、TP.2～TP.5のIII層及びIV層より良好な遺物の出土がみられた。出土遺物の内容としては、縄文時代晩期の沈線文をもつ粗製深鉢、貼付文をもつ粗製深鉢、扁球状の胴部をもつ精製浅鉢、砂岩製叩石、黒曜石製二次加工剥片、黒曜石剥片、古墳時代の甕、中世の青花碗、青磁碗、土師皿などがある。また、TP.3及びTP.4においては、IV層上面において溝の検出があった。以上の結果から大崎鼻遺跡にかかる事業計画地のうち、TP.2～TP.5を含む部分約600m²について、着工前に本調査が必要と判断した。

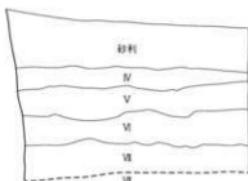


第2図 範囲確認調査調査坑配置図 ($S = 1/2,500$)

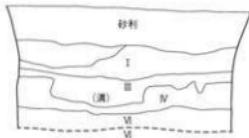
TP.1 南壁 基準 4.27



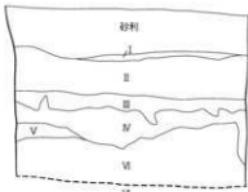
TP.2 南壁 基準 4.27
+0.500m



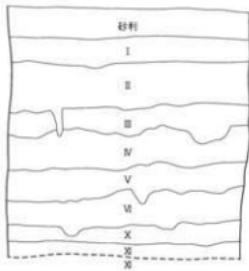
TP.3 南壁 基準 4.27



TP.4 南壁 基準 4.27



TP.5 南壁 基準 4.27 -0.500m



0 2m

第3図 範囲確認調査調査坑土層実測図 (S = 1 / 40)

第Ⅲ章 本調査

調査の概要

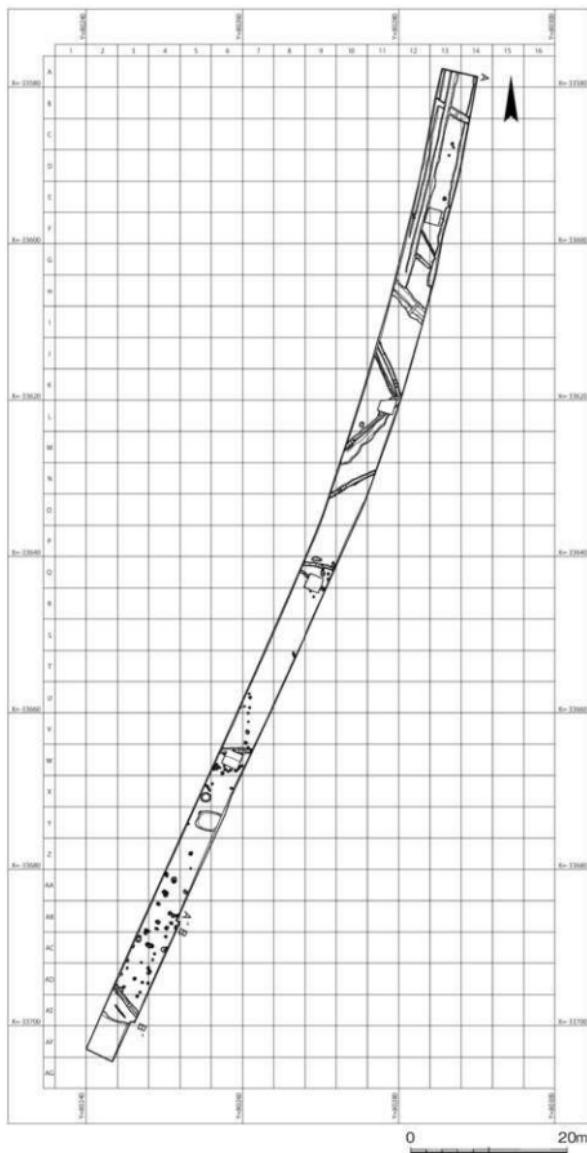
本調査は、令和4年4月16日から令和4年8月12日の期間において実施した。はじめの掘削には重機を投入し、まず鉄道の道床であった砂利層を取り除き、次に近世以降に造成された表土層を除去した。表土剥ぎが完了した段階で調査区全体を網羅するように4m間隔の調査グリッドを設定し、基本的にこのグリッドを単位として層位ごとに人力での掘削調査を行った。遺物の取り上げについてもグリッドごとに一括して行った。

範囲確認調査の結果に基づき、Ⅲ層及びⅣ層を掘削調査対象とし、Ⅳ層上面及びⅤ層上面において遺構の検出作業を行った。また、Ⅴ層上面までの調査が完了したうえで、4箇所のトレンチを設定し、Ⅴ層中の遺物の出土状況を確認し、ある程度出土のまとまってあったN列からT列の調査区中央部分については、Ⅴ層の補完調査を行った。

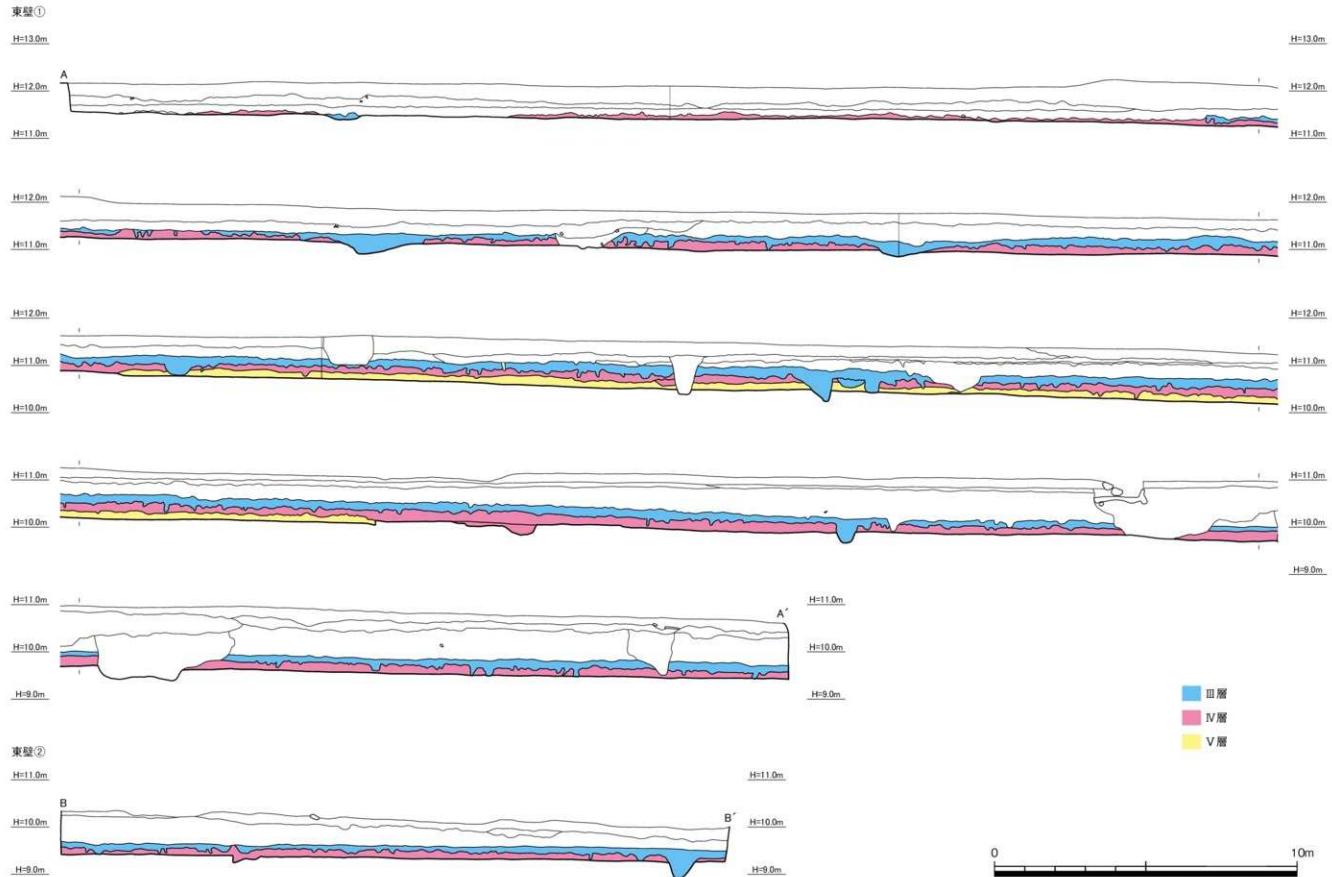
基本土層

本調査における基本土層は以下のとおりである。VI層以下は範囲確認調査における調査坑の壁面再観察によるものである。

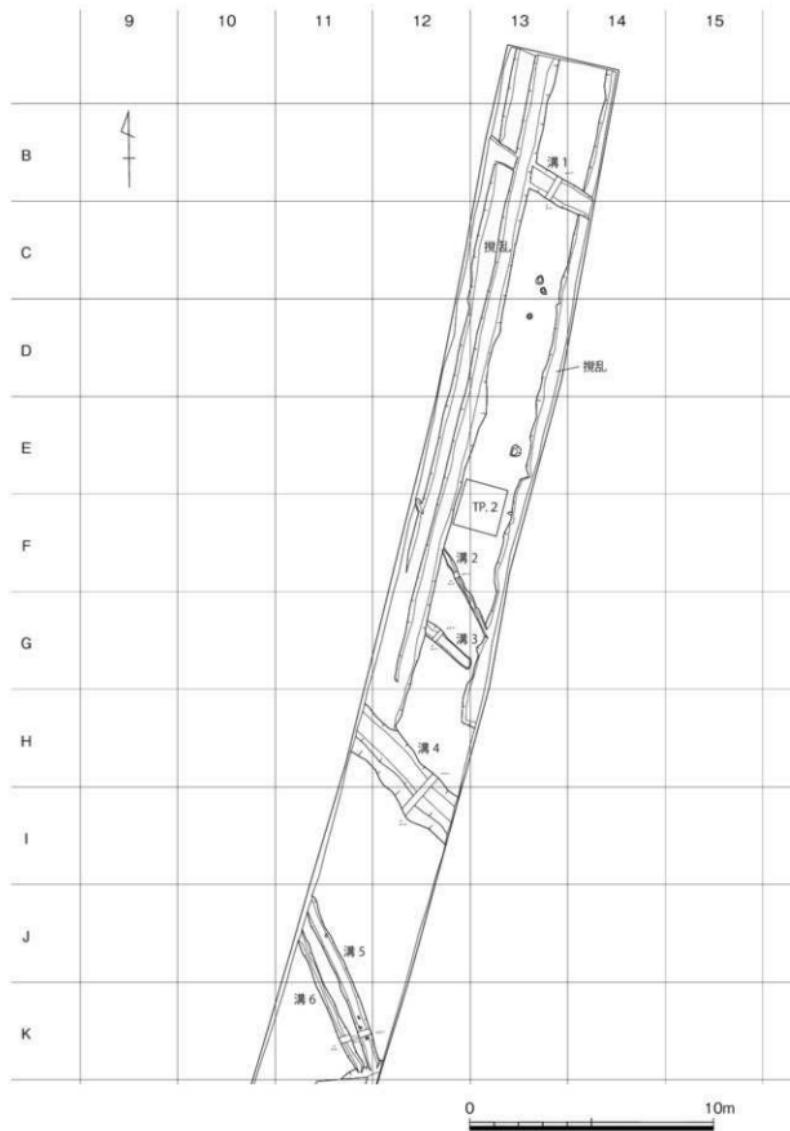
- I層 表土。灰褐色土。2cm以下の砂礫を多く含む。
- II層 灰黄褐色土。下位ほど暗色。1cm以下の礫を多く含む。
- III層 黒褐色土。きめの細かい火山灰土。砂礫の混入はなく、粘性は弱い。
- IV層 にぶい黄褐色土。きめの細かい火山灰土。砂礫の混入はなく、粘性は弱い。弥生時代中期の遺物包含層。
- V層 にぶい黄褐色土。IV層よりやや暗色で、IV層より強く縮まる。粘性は弱い。縄文時代後・晚期遺物包含層。
- VI層 にぶい黄褐色土。数cm大の円形をなす明黄褐色の生痕が多数確認される。やや粘性が強く、縮まりはV層ほどではない。
- VII層 暗褐色土。粘性が強く、よく縮まる。5mm以下の白色バミスを多く含み、下位ほど量を増す傾向にある。TP.4付近では下半部で縦方向のクラックが入る。
- VIII層 明黄褐色土。非常に粘性が強い。
- IX層 にぶい橙色土。非常に粘性が強い。上位はほとんど礫を含まないが、7~8cmほど下がると1cm以下の黄橙色を呈する風化礫を多く含むようになる。



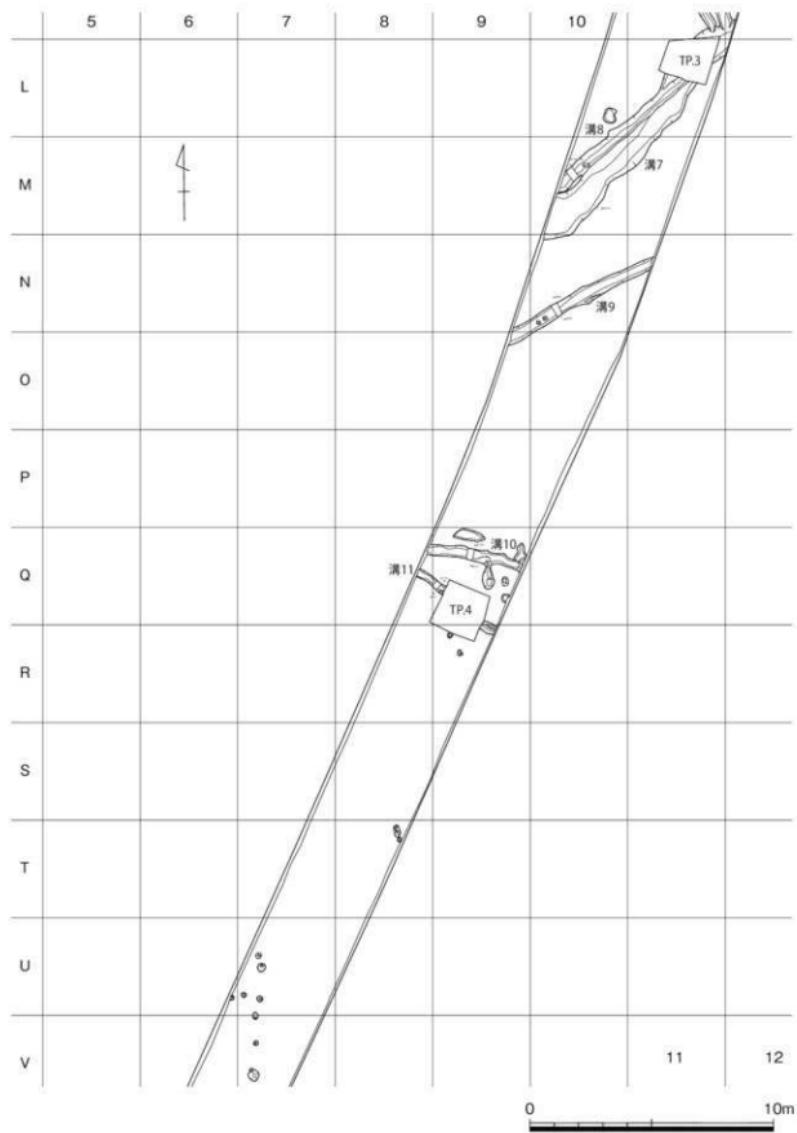
第4図 本調査区IV層上面遺構配置図 [全体] (S = 1/600)



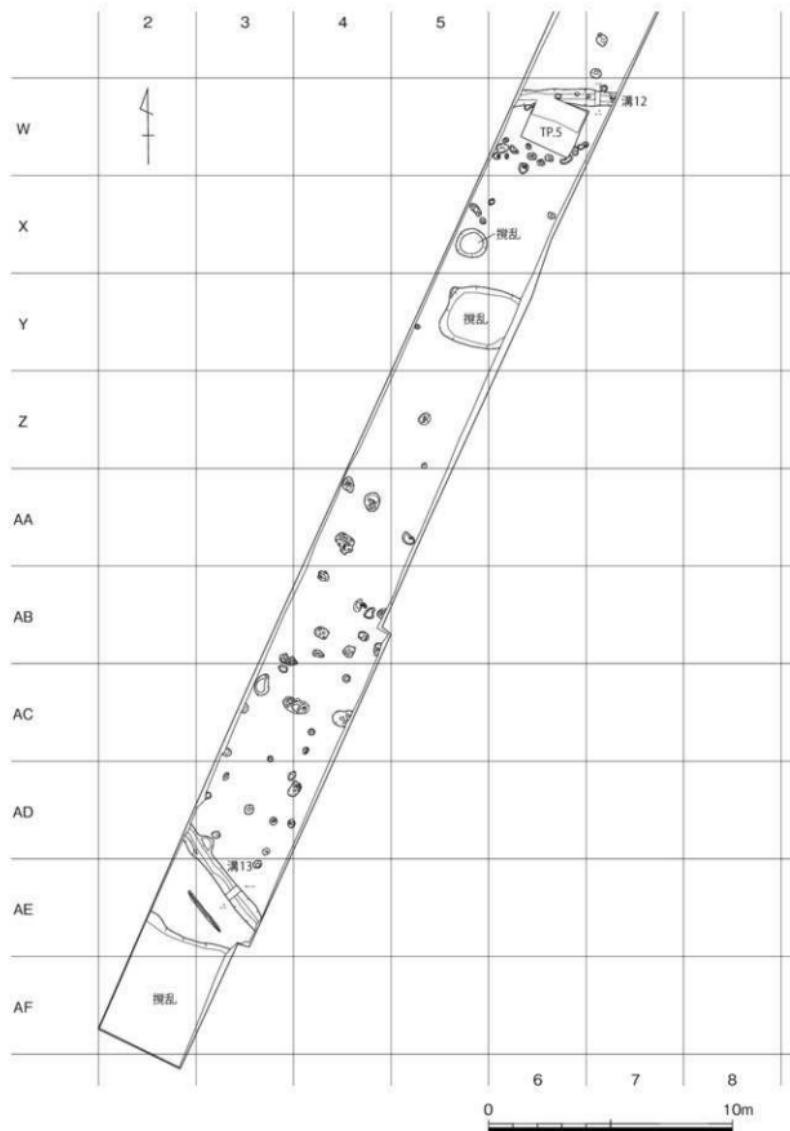
第5図 本調査区東壁土層図 (S = 1 / 80)



第6図 本調査区IV層上面造構配置図 [部分①] (S = 1/200)



第7図 本調査区IV層上面構造配置図 [部分②] (S = 1/200)



第8図 本調査区IV層上面構造配置図 [部分③] (S = 1/200)

検出遺構

IV層上面において、溝状遺構13条の検出をみた。埋土中の遺物は多くないが、溝13からは青磁片の出土があり、溝の多くが中世期に属するものと思われる。また、調査区の南端部、AA列～AF列付近ではまとまったピットの検出がみられたが、建物跡の確認にまでは至らなかった。

V層上面においては、明らかな人為的に造営されたと判断される遺構の検出には至らなかった。同様に部分的に掘削調査を行ったN列からT列のVI層上面においても、遺構の検出には至っていない。

溝1

調査区の最も北側、グリッドB13からグリッドC14にかけての検出である。北西から南東へと走る。幅100cm～106cm、深さ18cmを測る。

溝2

グリッドF12からグリッドG13にかけての検出である。幅22cm～30cm、深さ5cmを測るが、幅、深さともに後世の削平の影響を考慮する必要がある。

溝3

グリッドG12からの検出である。溝2と隣り合うが、主軸方向はややずれている。また、溝4とは平行して並ぶ。幅44cm～58cm、深さ4cmを測るが、溝2同様、幅、深さともに後世の削平の影響を考慮する必要がある。

溝4

グリッドH11からグリッドI12にかけての検出である。隣り合う溝3と平行に走る。幅168cm～204cm、深さ35cmを測る。

溝5

グリッドJ11からグリッドK11にかけての検出である。溝6と平行して走る。幅50cm～58cm、深さ20cmを測る。

溝6

グリッドJ11からグリッドK11にかけての検出である。溝5と平行している。幅28cm～48cmと若干溝5よりは幅が狭い。深さは15cmを測る。

溝7

グリッドM10からグリッドL11にかけての検出である。溝8とほぼ平行して南西から北東へと走っており、途中より溝8と重なる。溝7のはうが先行して造営され、その後に溝8が造営されている。幅48cm～60cm、深さ13cmを測る。

溝 8

グリッドM10からグリッドL11にかけての検出である。溝7と平行する。幅128cm～146cm、深さ21cmを測る。

溝 9

グリッドO9からグリッドN11にかけての検出である。溝7、溝8と同様、南西から北東へと方向をとる。幅50cm～74cm、深さ14cmを測る。

溝10

グリッドQ9においての検出である。溝11と隣り合うが、主軸方向は若干ずれる。幅42cm～50cm、深さ9cmを測る。

溝11

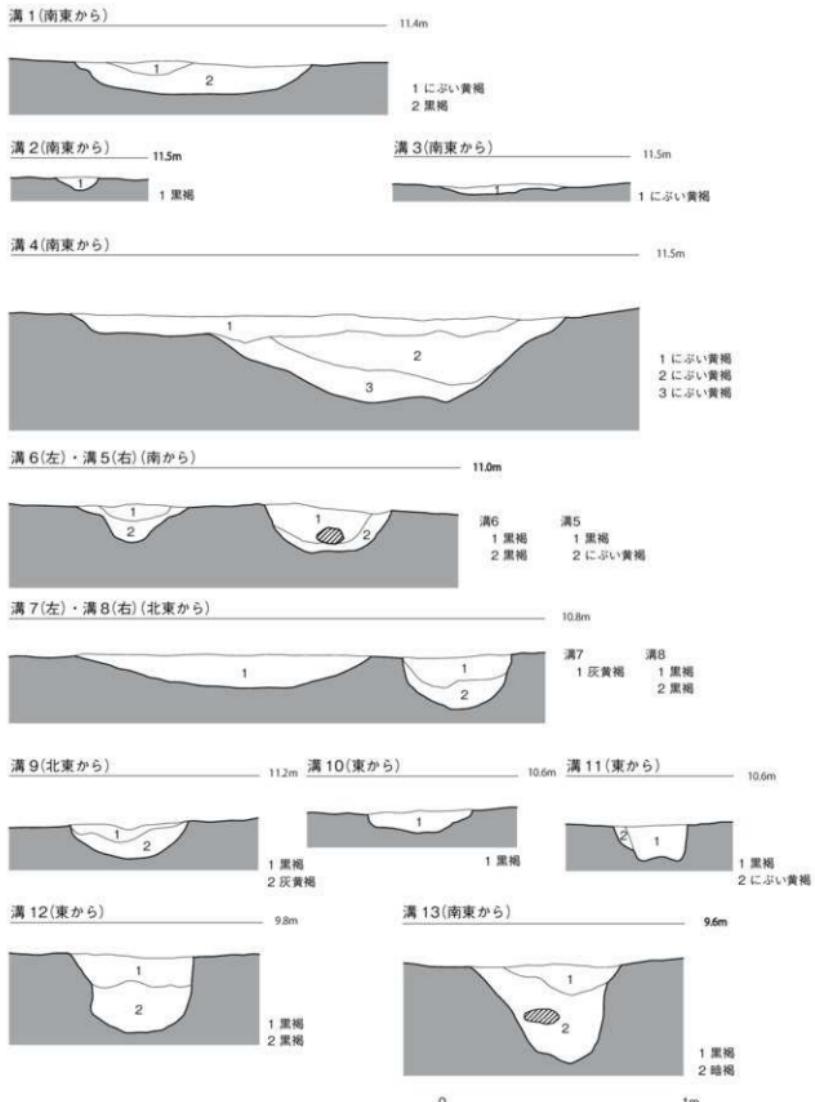
グリッドQ8からグリッドR9にかけての検出である。溝10と隣接する。幅30cm～34cm、深さ15cmを測る。

溝12

グリッドW6からグリッドW7にかけての検出である。主軸方向をほぼ東西にとる。幅56cm～64cm、深さ32cmを測る。

溝13

グリッドAD2からグリッドAE3にかけての検出である。主軸方向を北西から南東へととる。幅54cm～72cm、深さ40cmを測る。埋土内より青磁碗の破片がみられた。



第9図 本調査区IV層上面検出溝断面実測図 ($S = 1/20$)

出土遺物

土器ほか

1・2は縄文時代早期の押型文土器である。

1は外反する口縁部の資料で、外面及び口唇部に大ぶりの山型文を施す。外面は縦方向の施文である。2は復元底径16.4cmを測る底部である。外面には斜方向の粒の小さい楕円文が施され、底面には網代圧痕が残る。

3～15は縄文時代後期の資料である。3は中膨らみする胴部からいたんすぼまって大きく開いて口縁部に至る深鉢で、外面は研磨調整、内面は丁寧なナデ仕上げである。復元口径は24.6cmを測る。

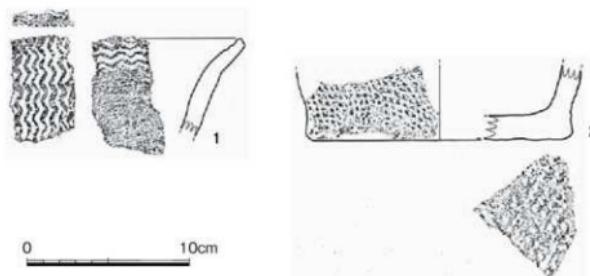
4は深鉢のすぼまる部分の資料で、外面には横方向の研磨調整を施す。5・6は外傾する口縁部で、どちらも外面が研磨調整である。7は鉢の頭部から口縁部にかけての資料で、波頂部は仄くが、波状の口縁をなす。口縁部外面には3条の沈線と縄文が認められ、内外面ともに研磨調整である。8は波状をなす鉢の口縁波頂部である。9・10は横方向の刺突列点が認められる。11は鉢の肩部で、外面には平行沈線と縄文が施される。12は底部に近い胴部下位の資料で、粘土紐の積み上げが観察される。13～15は底部の資料で、いずれも若干の上げ底となる。13の復元底径は8.8cmである。

16～95は縄文時代晩期の資料である。

16～75は深鉢もしくは鉢の資料である。16はやや内傾する口縁部である。外面に斜方向の貝殻条痕調整が入る。17はわずかに外傾するものと思われる。18は口唇部上面からのナデによって外端部に段を作る。19・20は胴屈曲部の資料である。

21～66は胴部でいたん膨らみを作るか屈曲し、そこからすぼまるか肩部を作つて大きく開く口縁部へと至る深鉢の資料である。口縁部には外面に沈線をもたないもの、間隔の広い平行沈線を横方向に施すもの、弧状の沈線を引くものがみられる。21～35は沈線が認められないものである。21・22は非常に薄い作りで、外面には横方向の貝殻条痕調整を施す。23、26、28は口唇部を上方からのナデによって平坦に整える。21、24、34は先細りになる断面形状である。29は口縁部に突起をもつ。

36～53は間隔の広い平行沈線を施すものである。いずれも外面には丁寧なナデ調整を行つたのち沈線を施す。46は口唇部に指おさえによる凹点をもつ。



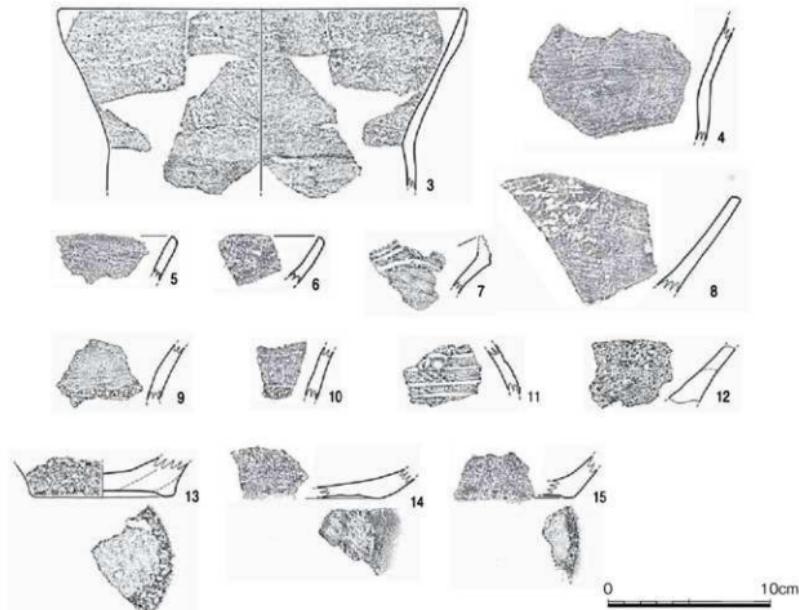
第10図 出土土器ほか実測図① (S = 1 / 3)

54・55は弧状沈線の起点となるものと思われる。口縁部から胴部への垂下沈線をもつ。56～60は弧状沈線の確認できるものである。56は垂下する沈線と弧状の沈線が確認できる。57は大きく開く口縁部で、口唇部は丸く整える。弧状沈線の起点が認められる。

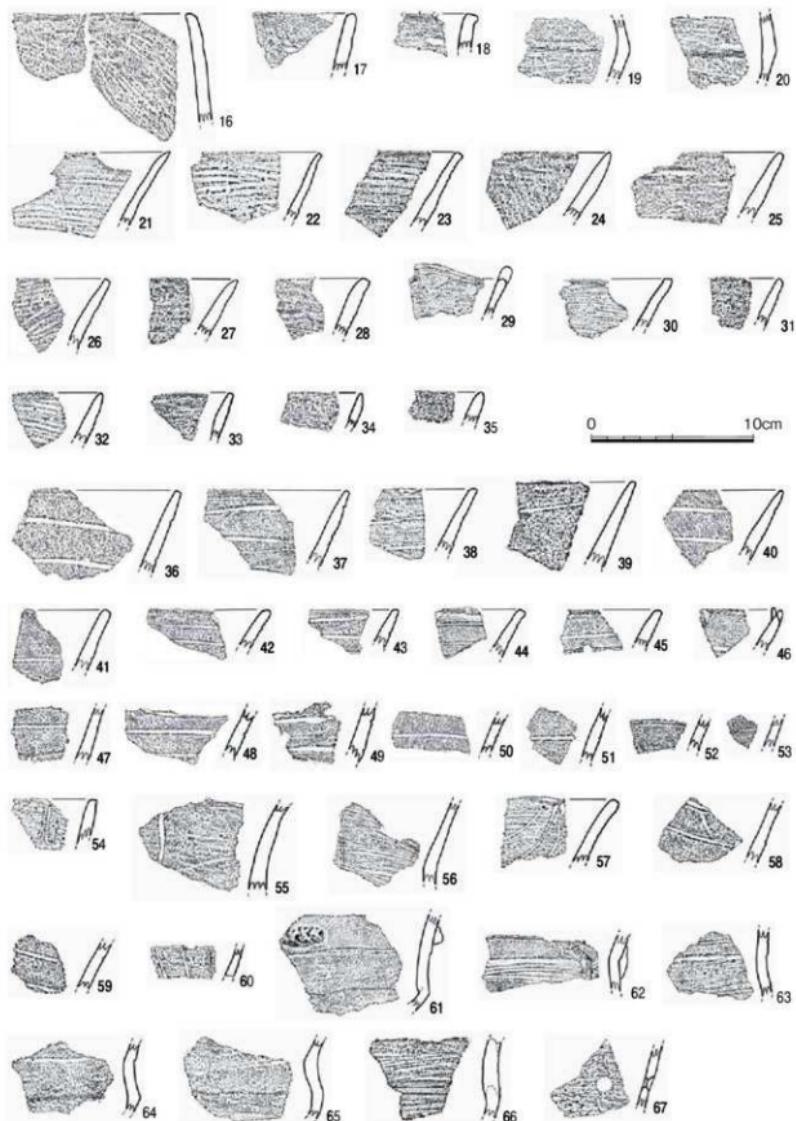
61～64は肩部の資料で、胴屈曲部から少し上がったところに段を設ける。61は段直上に粘土塊を貼り付け、刻目を施す。62は段にまたがるように粘土塊を貼り付ける。65・66は断面緩くカーブして胴部の膨らみを作るものである。

67は深鉢胴部片であるが、焼成後に内外両方から施した穿孔が認められる。

68～75は深鉢底部の資料である。68、70～73は断面張り出しをもつものである。68は底面に複数の圧痕状のくぼみをもつ。70・71はやや上げ底となる。75は厚底、上げ底となる。比較的小型の土器である。底径は、68が9.8cm、69が10.9cm、73が6.4cm、75が5.9cmである。また、復元の底径で、70が9.8cm、71が8.2cm、72が8.3cm、74が9.3cmである。



第11図 出土土器ほか実測図② (S = 1/3)



第12図 出土土器ほか実測図③ (S = 1 / 3)

76～95は浅鉢の資料である。

76・77は粗製浅鉢である。76は口縁部の資料で、比較的薄手の器壁、外面には炭化物の付着がある。77は胴部の資料で、外面は擦過調整、内面はナデ調整である。

78～95は精製の浅鉢である。78～88は浅めの胴部に肩部をあって、そこから長い頸部が外反して丸縁の口縁部に至るものである。78～85は口縁部の資料で、いずれも外面に沈線を引く。78は復元口径8.8cmを測る小型品である。86は頸部の資料、87・88は肩部の資料である。

89～94は扁球状の胴部に短い頸部と丸縁の口縁部がつく器形のものである。89・90、93は口縁部外面に沈線を引く。また、92は口縁部外面に段を設ける。91は沈線を引いていない。94は胴部最大径付近の資料である。

95は小型品の口縁部であるが、リボン状突起が認められ、おそらくその左右にヒレ状突起をもつものと思われる。リボン状突起直下には焼成前の穿孔が施されている。

96～125は弥生土器である。

96～109は壺口縁部の資料で、断面形状で見ると96～99のように肥厚させるもの、101～104のように外へ水平方向に張り出して逆L字をなすもの、105～109のように外への張り出しが上向きに反りあがるもの認められる。100の復元口径は外径33.2cm、内径26.0cmである。

110・111は壺胴部の資料である。どちらも外面に刷毛目調整がみられる。112～114は壺底部の資料である。いずれも外面には刷毛目調整が観察される。114は底面に凹部をもつ。112は復元底径7.7cm、113は復元底径5.8cm、114の底径は6.7cmである。

115は鉢口縁部である。116～124は壺の資料である。116は外側へと張り出す口縁端部に板状工具による刻目を施す。117・118は胴部から口縁部への内傾が強く、口縁部は逆L字形となる。119・120は外反する口縁部である。119は口唇部に刻目を施す。120は内面に薄く丹塗りの痕跡が残る。121・122は胴部の資料で、どちらも外面に丹塗りを施す。123・124は底部の資料である。123は平底で復元底径8.4cmを測る。124は復元底径4.3cmである。

125は器台と思われる。外面には刷毛目調整が認められ、復元底径は9.9cmである。

126は古墳時代初頭の壺口縁部である。外へと開き、外面には炭化物が付着する。

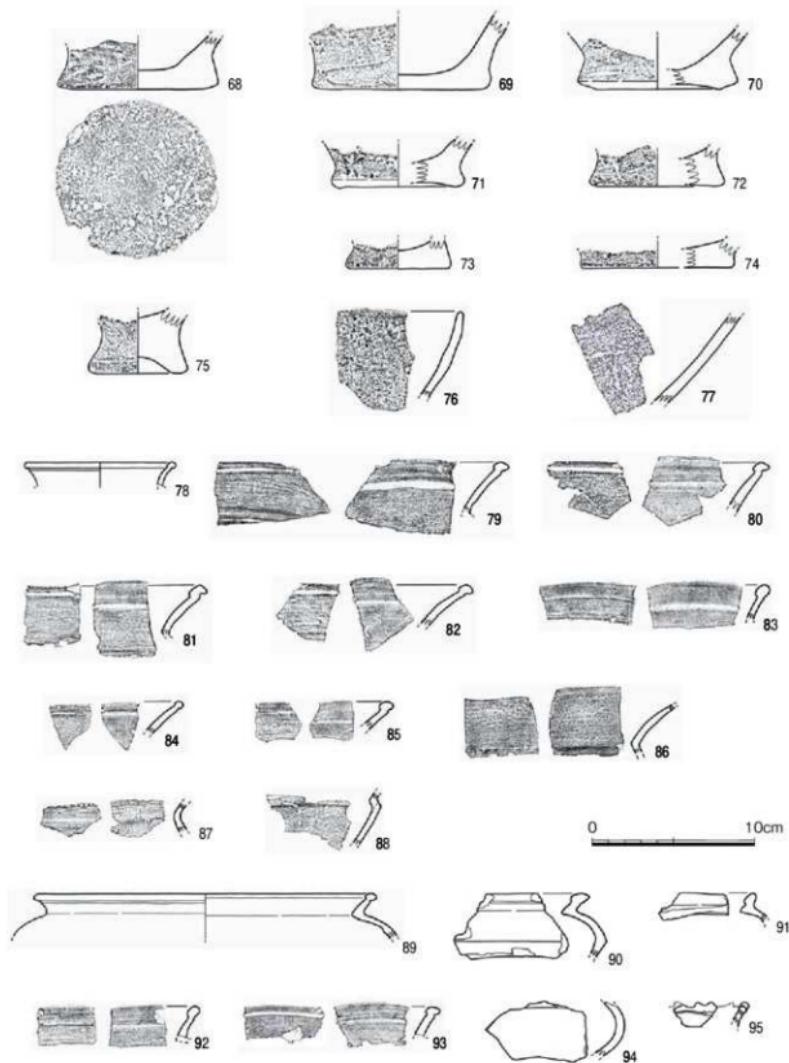
127～138は中世の資料である。

127～129は青花である。127は外反する碗の口縁部で、外面に草花文を、内面に雷文を描く。128は外反する口縁部で皿になるか。129は皿口縁部で、外面に点文を入れる。

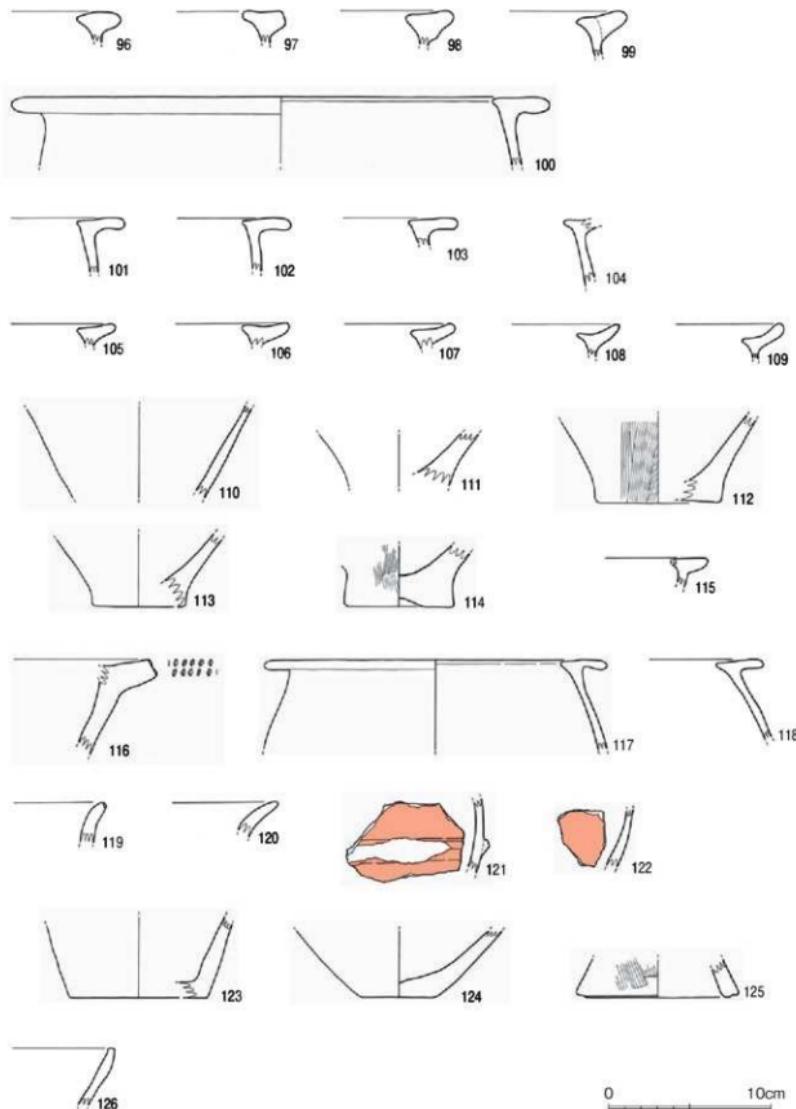
130は青磁碗である。口縁部はわずかに外反する。

131～135は土師器である。132を除き、いずれも底面に糸切りの痕跡を残す。131は復元底径6.2cm、復元口径11.8cm、器高3.2cmを測る。134は復元底径4.6cm、復元口径6.3cm、器高1.8cmを測る。

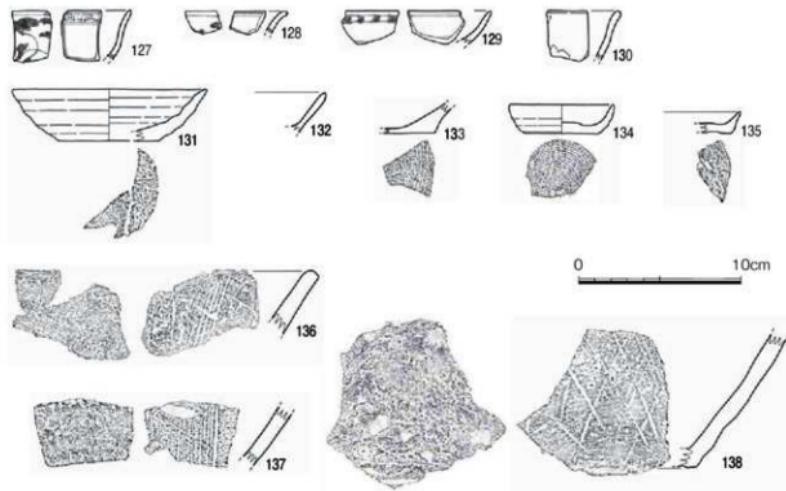
136～138は瓦質の擂鉢である。



第13図 出土土器ほか実測図④ (S = 1 / 3)



第14図 出土土器ほか実測図⑤ (S = 1 / 3)



第15図 出土土器ほか実測図⑥ (S = 1 / 3)

第1表 出土土器ほか觀察表①

図	番号	グリッド	層位	文様・調整		色調		胎土	備考
				外側	内面	外側	内面		
10	1	A14	IV層	山形押型文 透	山形押型文、透	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色、浅 黄	角閃石・長石・石英	口縁部に山形押型文
	2	-	IV層	指円押型文	ナデ	浅黄	浅黄	角閃石・長石・石英	底面に削代压痕
	3	C12	V層	研磨	ナデ	にぶい黄、黒褐色	にぶい黄褐色、暗 灰褐色	角閃石・長石・石英	
	4	AB4	IV層	研磨	ナデ	橙、にぶい黄	にぶい黄褐色、に ぶい黄	角閃石・長石・石英	
	5	AC4	Ⅲ層	研磨	ナデ	にぶい黄、にぶい 黒褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	
	6	I12	Ⅲ層	研磨	ナデ	にぶい黄、に ぶい白	にぶい黄	角閃石・長石・石英	
11	7	-	搅丸	沈縮、繩文/研磨	研磨	にぶい黄、にぶい 黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	
	8	AC3	IV層	研磨	擦過	にぶい黄、暗灰 褐色	黒褐色、灰褐色	角閃石・長石・石英	波状口縁
	9	AB4	IV層	列点/研磨	ナデ	灰褐色、暗灰褐色	浅黄、暗灰褐色	角閃石・長石・石英	
	10	AC4	IV層	列点/ナデ	ナデ	浅黄、黄褐色	浅黄	角閃石・長石・石英	
	11	AC4	IV層	沈縮、磨削繩文 ナデ	ナデ	浅黄	にぶい黄	角閃石・長石・石英	
	12	U7	IV層	擦過	ナデ	褐	黄褐色、暗灰 褐色	角閃石・長石・石英	
	13	S8	V層	ナデ	ナデ	橙、にぶい黄	暗灰褐色、黄褐色	角閃石・長石・石英	
	14	R8	IV層	研磨、擦過	ナデ	浅黄、灰褐色	浅黄、灰褐色	角閃石・長石・石英	
	15	AD3	IV層	研磨	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	
	16	N10	V層	貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい黄、黄褐色	にぶい黄、黄褐色	角閃石・長石・石英	
	17	AA4	IV層	ナデ	ナデ	暗褐色、褐	にぶい黄褐色、明 赤褐色	角閃石・長石・石英、赤色粒子	
	18	AD3	Ⅲ層	擦過	ナデ	浅黄	暗灰褐色	角閃石・長石・石英	
	19	T7	IV層	貝殻条痕・ナデ	擦過	灰褐色、灰黄褐色	黄褐色、にぶい黄	角閃石・長石・石英	
	20	T7	Ⅲ層	擦過	褐、灰黄褐色	黄褐色	角閃石・長石・石英		
	21	S9	IV層	貝殻条痕・ナデ	ナデ	明赤褐色	暗灰褐色、黄褐色	長石・石英	
	22	Z5	IV層	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄、明黄 褐色	明黄褐色	角閃石・長石・石英	
	23	N10	V層	貝殻条痕	ナデ	明褐色、橙	明黄褐色、黑褐色	角閃石・長石・石英	
	24	AB4	IV層	擦過・ナデ	ナデ	暗灰褐色、にぶい 黄	にぶい黄、黄褐色	角閃石・長石・石英	
	25	S8	IV層	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色、に ぶい黄	にぶい黄褐色、に ぶい黄	角閃石・長石・石英、赤色粒子	
	26	T9	IV層	貝殻条痕	ナデ	暗灰褐色、にぶい 黄褐色	黄褐色	角閃石・長石・石英	
	27	Q9	IV層	擦過	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	角閃石・長石・石英	
	28	Q9	IV層	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄	角閃石・長石・石英	
12	29	S8	V層	ナデ	ナデ	明黄褐色、黄褐色	にぶい黄褐色、黄 褐色	角閃石・長石	リボン状突起
	30	S8	Ⅲ層	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄褐色	明赤褐色、にぶい 黄褐色	角閃石・長石・石英	
	31	AD3	Ⅲ層	擦過	ナデ	浅黄	浅黄	角閃石・長石・石英	
	32	J12	Ⅲ層	貝殻条痕	ナデ	黄褐色、にぶい黄	黄褐色、にぶい黄	長石・石英	
	33	AE2	Ⅲ層	擦過	ナデ	暗褐色	褐、黄褐色	角閃石・長石	
	34	Q9	V層	擦過	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	長石・石英	
	35	N10	Ⅲ層	擦過	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄	角閃石・長石・石英	
	36	U7	IV層	沈縮/ナデ	貝殻条痕・ナデ	黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	
	37	T7	IV層	沈縮/ナデ	ナデ	にぶい黄褐色、に ぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	
	38	T7	IV層	沈縮/ナデ	ナデ	黑褐色	にぶい黄褐色、明 赤褐色	角閃石・長石・石英	
	39	T7	IV層	沈縮/ナデ	ナデ	灰黄	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	
	40	P9	IV層	沈縮/ナデ	ナデ	にぶい黄褐色、褐	明赤褐色	角閃石・長石・石英	
	41	R8	V層	沈縮/ナデ	ナデ	暗褐色	黄褐色、褐	角閃石・長石・石英	
	42	U7	IV層	沈縮/ナデ	ナデ	明褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	
	43	T7	IV層	沈縮/ナデ	ナデ	褐	明赤褐色	角閃石・長石・石英	
	44	R8	IV層	沈縮/ナデ	ナデ	にぶい黄褐色、明 赤褐色	にぶい黄	角閃石・長石・石英	
	45	U7	IV層	沈縮/ナデ	ナデ	にぶい褐	明赤褐色	角閃石・長石・石英	

第2表 出土土器ほか観察表②

図	番号	グリッド	層位	文様・調整		色調		胎土	備考
				外側	内面	外側	内面		
	46	T8	IV層	沈縦/ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	角閃石・長石・石英	
	47	X6	IV層	沈縦/ナデ	ナデ	にぶい黄	裡	角閃石・長石・石英	
	48	U7	IV層	沈縦/ナデ	ナデ	にぶい褐、にぶい黄褐	にぶい黄	角閃石・長石・石英	
	49	R8	III層	沈縦/ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	角閃石・長石・石英	
	50	W7	III層	沈縦/ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	角閃石・長石・石英	
	51	M10	IV層	沈縦/ナデ	ナデ	にぶい褐、にぶい黄褐	裡	角閃石・長石・石英	
	52	U7	IV層	沈縦/ナデ	ナデ	にぶい黄褐	明褐	角閃石・長石・石英	
	53	A14	III層	沈縦/ナデ	ナデ	明赤褐	にぶい黄褐	角閃石・長石・石英	
	54	S8	V層	底下沈縦/貝殻 朱色・ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄	角閃石・長石・石英	
	55	-	挖孔	底下沈縦/貝殻 朱色・ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	角閃石・長石・石英	
12	J12	IV層	底下沈縦/貝殻 朱色・ナデ	貝殻条痕・ナデ	ナデ	赤褐、にぶい黄褐	赤褐、にぶい黄褐	角閃石・長石・石英	
	O9	IV層	底下沈縦/貝殻 朱色・ナデ	ナデ	褐	にぶい黄褐	角閃石・長石・石英		
	P8	IV層	底下沈縦/貝殻 朱色・ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	角閃石・長石・石英		
	U7	IV層	底下沈縦/貝殻 朱色・ナデ	ナデ	裡	裡	角閃石・長石・石英		
	60	AD3	II層	底下沈縦/貝殻 朱色・ナデ	ナデ	褐	明赤褐	角閃石・長石・石英	
	61	S8	II層	ナデ	ナデ	裡、にぶい黄褐	にぶい黄褐	角閃石・長石・赤色粒子	貼付文
	62	U7	IV層	沈縦/貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい褐、灰黄	にぶい褐、灰黄	角閃石・長石・石英	貼付文
	L11	IV層	沈縦/ナデ	貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	角閃石・長石・赤色粒子	
	V6	IV層	ナデ			暗灰黄、黒褐	にぶい黄、暗灰	角閃石・長石・石英	
	M11	IV層	擦過			明赤褐、にぶい黄褐	にぶい黄褐	角閃石・長石・石英	
	J12	II層	貝殻条痕			暗褐、黒褐	にぶい黄褐	角閃石・長石・石英	
	AD3	IV層	貝殻条痕			浅黄	浅黄	角閃石・長石・石英	焼成後穿孔
	P10	IV層	ナデ			黄褐、裡	にぶい黄、裡	角閃石・長石・石英	
	T7	IV層	ナデ			明褐、明赤褐	明黄褐、黄褐	角閃石・長石・石英	
	U7	IV層	貝殻条痕			にぶい黄褐、明赤褐	にぶい黄、黄褐	長石・石英	
	U8	IV層	ナデ			明赤褐、にぶい黄褐	にぶい黄褐	角閃石・長石・石英	
	S7	V層	ナデ			裡、にぶい黄褐	浅黄	角閃石・長石・石英	
	U7	IV層	ナデ			にぶい褐、赤褐	黒褐、灰黄褐	角閃石・長石・石英	
	AA4	II層	ナデ			明赤褐、橙	黃灰、黑褐、にぶい黄	角閃石・長石・石英	
	H12	II層	ナデ			明赤褐、黃褐	にぶい黄褐	角閃石・長石・石英	
	X6	IV層	ナデ			灰黄褐、橙	にぶい黄、黃褐	角閃石・長石・石英	
	P10	V層	擦過			明褐	にぶい黄	石英・滑石	
	T7	IV層	沈縦/研磨			にぶい黄、暗灰	にぶい黄、暗灰	長石	
	J12	IV層	沈縦/研磨	研磨		黃灰、暗灰黃	黃灰、暗灰黃	角閃石・長石・石英	
	T8	IV層	沈縦/研磨	研磨		明灰黃、にぶい黄	暗灰、暗灰黃	長石・赤色粒子	
	U8	IV層	沈縦/研磨	研磨		明灰黃、にぶい黄	暗灰黃、にぶい黄	長石・赤色粒子	
	S8	II層	沈縦/研磨	研磨		暗灰黃	暗灰黃	長石	
	V7	IV層	沈縦/研磨	研磨		黃灰	暗灰黃、黒褐	長石	
	AB4	II層	沈縦/研磨	研磨		浅黄	灰	長石・石英	
	S8	IV層	沈縦/研磨	研磨		灰オリーブ	灰オリーブ	長石・石英	
	U7	IV層	研磨	研磨		にぶい黄、黃褐	にぶい黄	長石・石英・赤色粒子	
	U7	IV層	研磨	研磨		にぶい黄褐、にぶい黄	黃褐、にぶい黄	長石・石英	
	Q9	II層	研磨	研磨		浅黄、暗灰黃	暗灰黃	長石	
	S8	IV層	沈縦/研磨	研磨		にぶい黄、にぶい黄	にぶい黄	角閃石・長石・石英	
	N11	IV層	沈縦/研磨	研磨		黃褐、にぶい黄	にぶい黄	長石	
13									

第3表 出土土器ほか觀察表③

図	番号	グリッド	層位	文様・調査		色調 外側 内面	胎土	備考			
				外側	内面						
13	91	V7	IV層	研磨	研磨、ナデ	黄灰、褐灰黄	黄灰、褐灰黄	角閃石・長石・石英			
	92	V7	IV層	研磨	研磨	黄灰	黄灰、にぶい黄	長石			
	93	AA5	IV層	沈泥/研磨	研磨	にぶい黄	にぶい黄、褐灰黄	石英			
	94	V7	IV層	研磨	研磨	にぶい黄、黄灰	にぶい黄、灰黄	角閃石・長石・石英			
	95	U7	IV層	沈泥/研磨	研磨	にぶい黄	にぶい黄、黒褐色	長石、赤色粒子			
	96	N10	IV層	ナデ	ナデ	橙	明黄褐	角閃石・長石・石英			
	97	N10	IV層	ナデ	ナデ	にぶい黄	灰黄	角閃石・長石・石英			
	98	F13	IV層	ナデ	ナデ	にぶい黄褐、灰 黒褐色	にぶい黄褐	角閃石・長石・石英			
	99	-	搅乱	ナデ	ナデ	褐灰黄、灰黄	褐灰黄	角閃石・長石・石英			
	100	O10	IV層	ナデ	ナデ	にぶい黄褐、に ぶい黄	にぶい黄褐、に ぶい黄	角閃石・長石・石英			
14	101	F13	IV層	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	橙、にぶい黄褐	長石・石英			
	102	F12	Ⅴ層	ナデ	ナデ	橙	角閃石・長石・石英				
	103	-	搅乱	ナデ	ナデ	橙	橙、黃褐	長石・石英			
	104	H12	Ⅴ層	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	角閃石・長石・石英			
	105	-	搅乱	ナデ	ナデ	にぶい黄	橙	角閃石・長石・石英			
	106	-	搅乱	ナデ	ナデ	橙	角閃石・長石・石英				
	107	-	搅乱	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	橙	角閃石・長石・石英			
	108	F12	Ⅴ層	ナデ	ナデ	黑褐、にぶい橙	橙	角閃石・長石・石英			
	109	-	搅乱	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	橙	角閃石・長石・石英			
	110	J11	Ⅴ層	刷毛目	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄	長石・石英			
15	111	N11	Ⅴ層	刷毛目	ナデ	にぶい橙、褐灰 にぶい黄	にぶい黄褐、に ぶい黄	長石・石英			
	112	O9	Ⅴ層	刷毛目	ナデ	灰黄褐、黒褐、 にぶい褐	にぶい褐	角閃石・長石・石英、赤色粒子			
	113	H12	IV層	刷毛目	ナデ	にぶい黄、明赤 褐色	明赤褐色	長石・石英			
	114	Q8	Ⅴ層	刷毛目	ナデ	にぶい黄褐、黃 褐	にぶい黄、黄灰	角閃石・長石・石英			
	115	O9	Ⅴ層	ナデ	明黄褐	にぶい黄褐、橙	角閃石・長石・石英				
	116	H12	Ⅴ層	刷毛目/ナデ	ナデ	にぶい黄褐、に ぶい黄	にぶい黄褐	角閃石・長石・石英			
	117	-	搅乱	研磨	ナデ	明褐	橙	長石・石英			
	118	-	搅乱	研磨	ナデ	橙	明黄褐、橙	長石・石英			
	119	AE3	IV層	刷毛目/ナデ	ナデ	橙	明赤褐	長石・石英			
	120	J12	Ⅴ層	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐、に ぶい赤褐	角閃石・長石・石英			
15	121	J12	Ⅴ層	研磨	ナデ	にぶい赤褐、に ぶい褐	明黄褐	角閃石・長石・石英			
	122	J12	Ⅴ層	研磨	ナデ	褐、にぶい黄褐	明黄褐	角閃石・長石・石英			
	123	O10	IV層	研磨	刷毛目・ナデ	にぶい褐、黑褐	明赤褐	角閃石・長石・石英			
	124	O9	Ⅴ層	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	角閃石・長石・石英			
	125	K11	IV層	刷毛目	ナデ	明黄褐	橙	長石・石英			
	126	-	ハイド	ナデ	ナデ	明赤褐、黑 橙、黑褐	黑褐、黄灰	胎土に炭化物			
	127	-	搅乱	團鑵・草花文	雷文	不明	不明	-			
	128	-	團鑵	團鑵・草花文	團鑵	明銀灰	明銀灰	-			
	129	-	搅乱	点文	團鑵	明オリーブ灰	明オリーブ灰	-			
15	130	-	搅乱	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	-			
	131	-	搅乱	团輪ナデ	团輪ナデ	橙、黑	橙、黑	赤色粒子			
	132	AC4	Ⅴ層	团輪ナデ	团輪ナデ	浅黄褐	浅黄褐	角閃石・長石・石英			
	133	AB4	Ⅴ層	团輪ナデ	团輪ナデ	橙	橙	角閃石・長石・石英、赤色粒子			
	134	-	搅乱	团輪ナデ	团輪ナデ	橙	橙	角閃石・長石・石英			
	135	AB4	Ⅴ層	团輪ナデ	团輪ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	角閃石・長石・石英、赤色粒子			
	136	-	搅乱	ナデ	刷毛目/ナデ	にぶい黄褐、橙	灰褐、にぶい黄 褐	角閃石・長石・石英			
	137	-	團鑵	ナデ	刷毛目/ナデ	灰褐、灰白	にぶい黄	角閃石・長石・石英			
	138	-	搅乱	ナデ	刷毛目/ナデ	黑褐	黑褐、黄灰	角閃石・長石・石英			

石器

1・2は石核である。1はサスカイトで、大きく自然面を残している。2箇所の剥離面をもつが、使用に耐えうるような剥片の作出には至っていないようである。2は黒曜石で、自然面を残す。打面を転回させながら限界まで剥離作業を行っている。

3・4は石鎌である。3は黒曜石製で、全体細身の作りで、基部には深くV字状の抉りを施す。4はサスカイト製である。両側片はやや膨らみをもち、基部は弧状に作り出す。5はサスカイト製の石鎌未成品である。表裏両面に素材面を残している。

6は幅1cm弱の継長の黒曜石剥片で、右側辺に使用によるものと思われる微細な剥離が連続する。

7は小型のノミ形石器で、左右の側辺には抉入部を作り、全体を丁寧に研磨している。頁岩製である。8は蛇紋岩製の磨製石斧である。片面は大きく剥離欠損しており、もう片面には素材面を大きく残す。刃部は使用による刃こぼれが観察される。

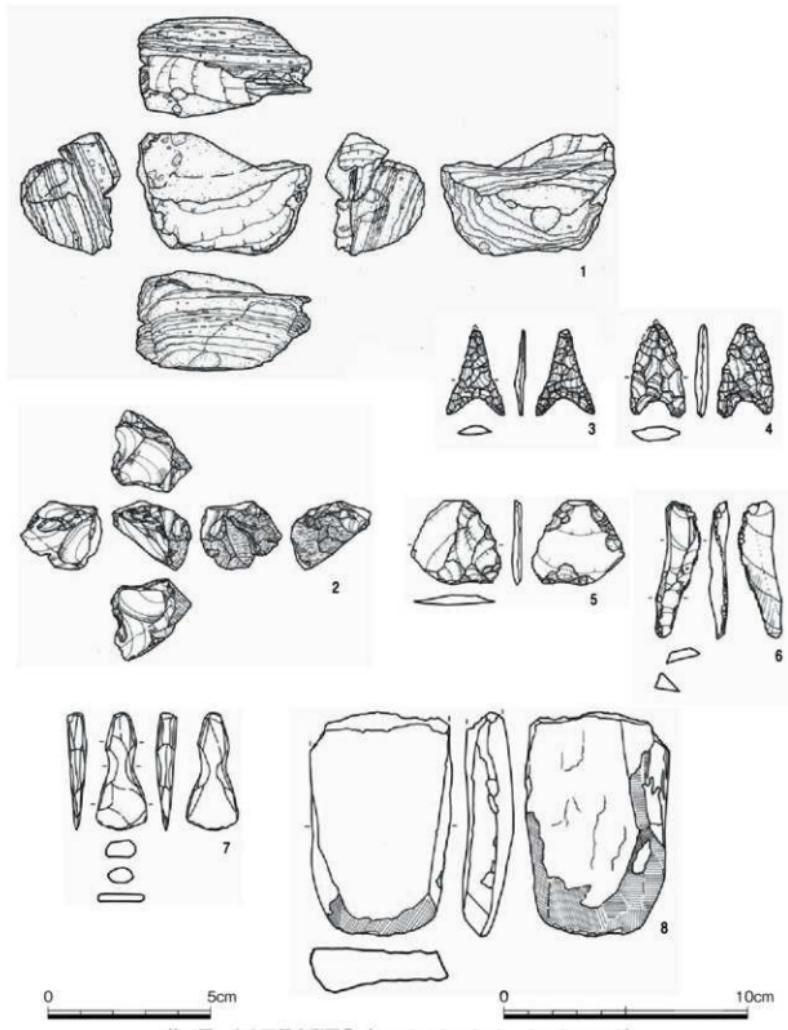
9～13は打製石斧である。いずれも安山岩製である。9は薄手の板状素材の縁辺に整形と刃部形成の剥離を施している。10は先細りとなる継長の剥片素材で、右側辺に整形のための切斷が行われているが、素材をほぼそのまま使用していて、剥離作業は刃部のみに限定的である。11は比較的小型の突き棒状の資料である。裏面と基部付近に素材面を残すが、全体的に整形のための剥離が行われている。12は撥形をなすものの基部付近である。表裏面に大きく素材面を残している。13は刃部の資料で、表裏両面に素材面を残す。刃部には使用による摩耗がみられる。

14～20は石錐である。14は扁平な水磨を受けた安山岩を素材としており、上下2箇所を打ち欠く。15は安山岩製で、上下2箇所に打ち欠きがみられる。16は扁平な砂岩の円礫を素材としている。長軸の端部に加工を施す。17は砂岩製で、上下、左右の4箇所に抉りを入れる。18はデイサイト製で2箇所に加工を行う。19は扁平な水磨を受けた安山岩で、分割したのちに長軸方向に2ヶ所の加工を施す。20はデイサイト製である。上下2箇所の加工部をもつが、下の方はいったん素材の分割を行ってから抉りを施している。

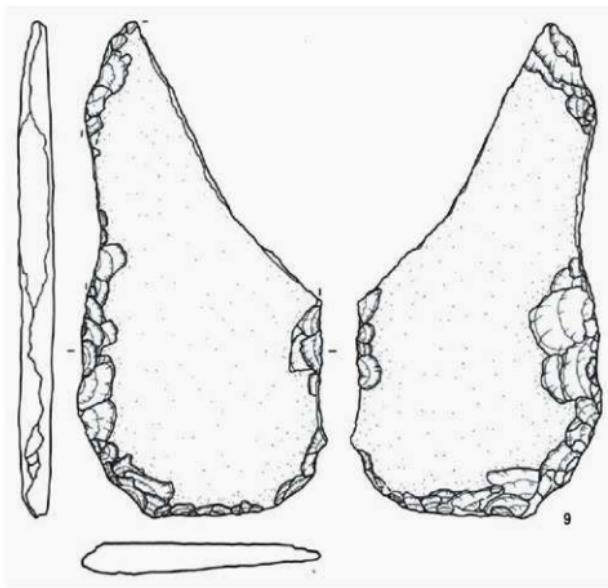
21は砂岩製の石皿・台石である。両面に滑面を形成するが、緩く窪みをもつ片面には敲打作業によるものと思われる細かい欠損が多数残る。22は安山岩製の台石である。敲打作業による作業面の剥落が密集する。23は安山岩製で、大きく二つの剥離面を残している。24・25は安山岩の板石である。一応台石としているが明瞭な作業面は持たず、打製石斧などの石器素材の可能性も残る。24は裏面が節理によって剥落している。

26～31は砂岩製の砥石である。26・27は研ぎ面の縁辺部が角を落としたかのように欠損しており、台石などとして転用された可能性がある。28は表裏面と残存する右側辺に研ぎ面がみられる。29は片面のみに研ぎ面を有し、裏面は剥落する。右側辺は水磨を受けた素材面を残す。30は研ぎ面を一面もつ。31は隅丸方形の扁平な水磨礫を素材としており、表裏両面が研ぎ面となっている。

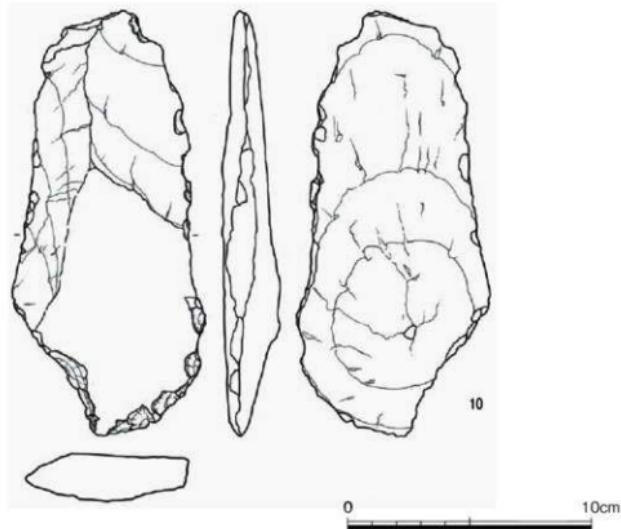
32～37は叩石である。35は安山岩製、ほかは砂岩製である。32は水磨礫をそのまま利用したもので、作業によるものと思われる欠損や剥離の集中が認められる。33は磨石との兼用であろう。側面には敲打痕の集中がみられる。また、ほぼ半分に欠損しているが、磨石としてはそのまま使用が継続されたらしく、割れ口には摩耗がみられる。34は欠損した磨石の叩石転用品である。35は周縁に潰痕と鋭利な対象物の打撃によるものとみられる線条痕が観察される。36は敲打によるものとみられる欠損と剥



第16図 出土石器実測図① (1~7 : S = 2/3, 8 : S = 1/2)

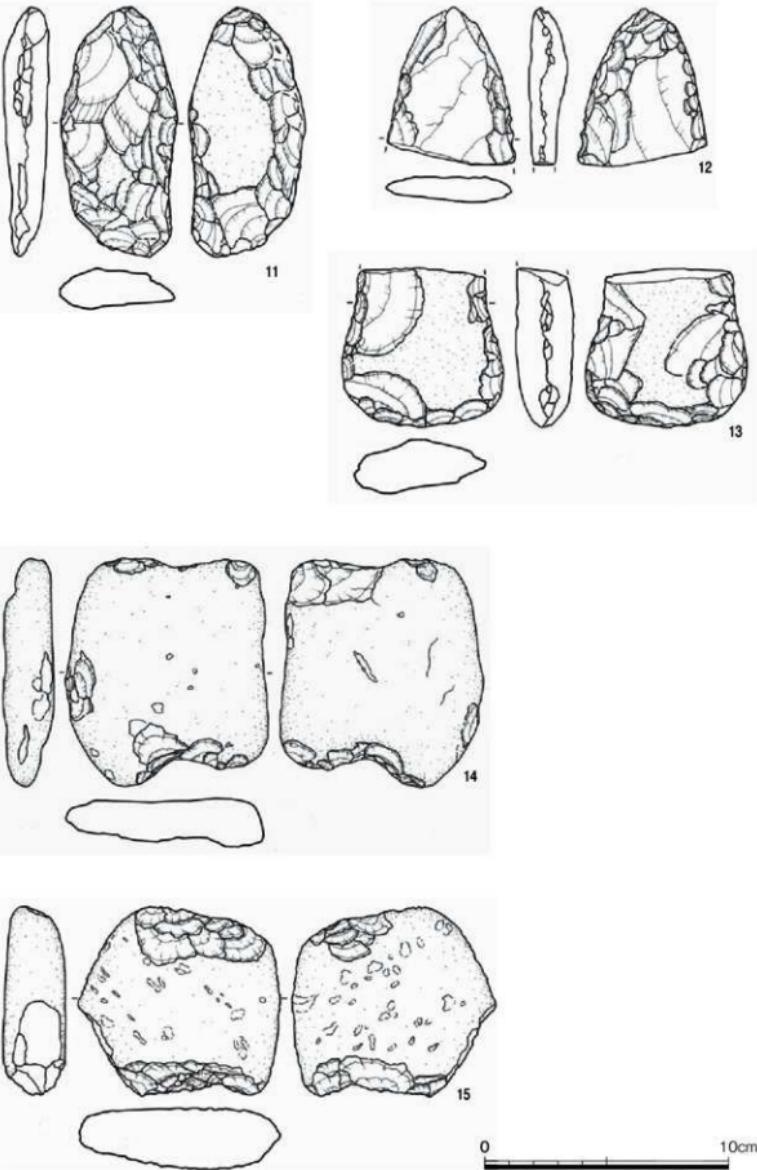


9

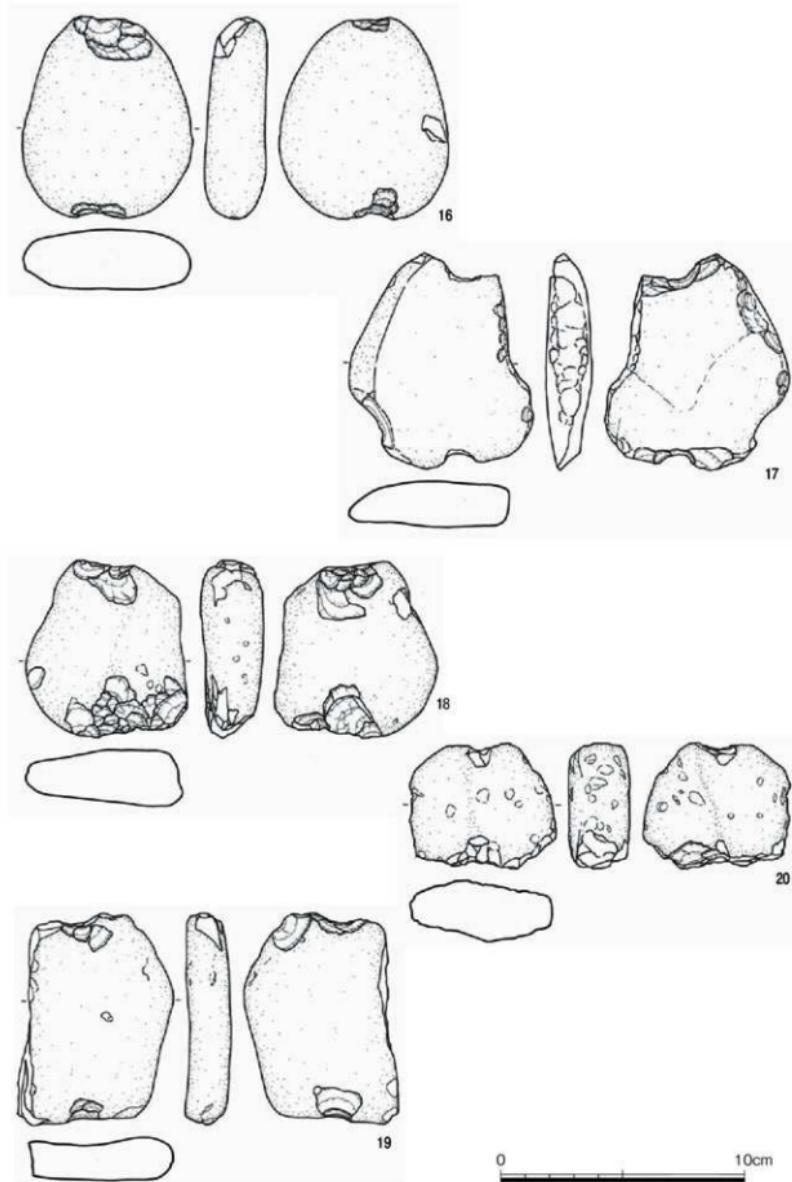


10

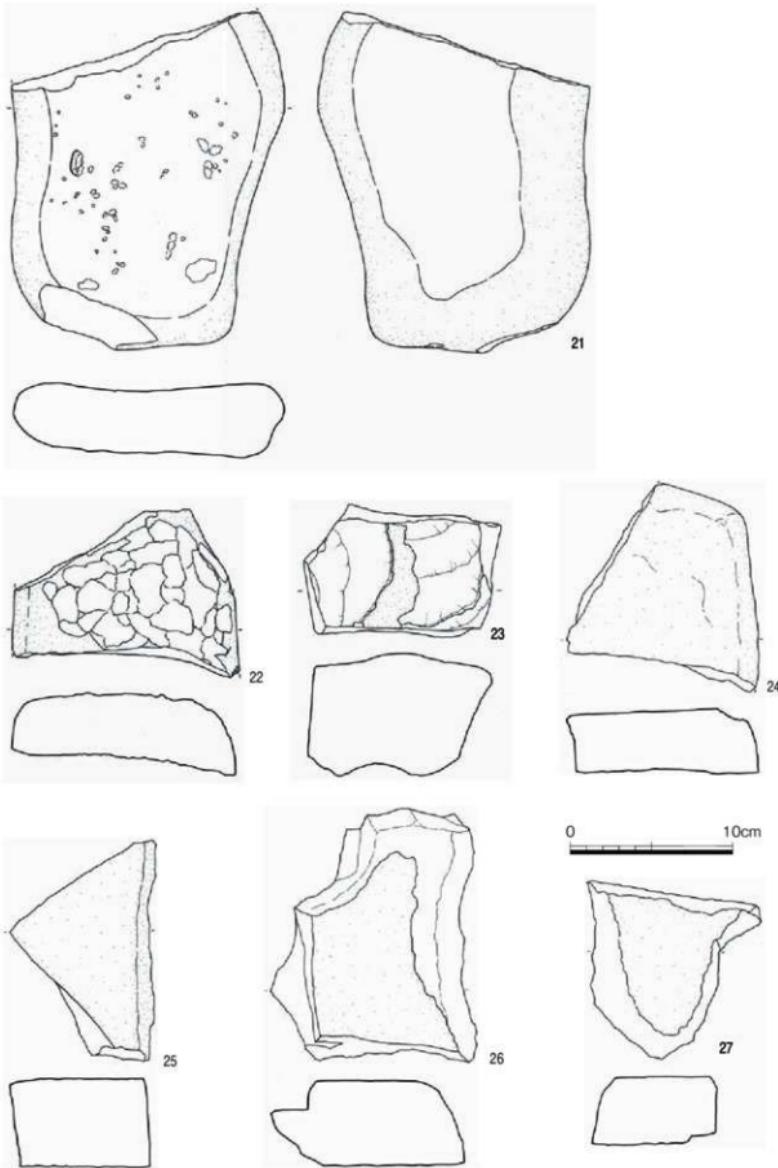
第17図 出土石器実測図② (S = 1 / 2)



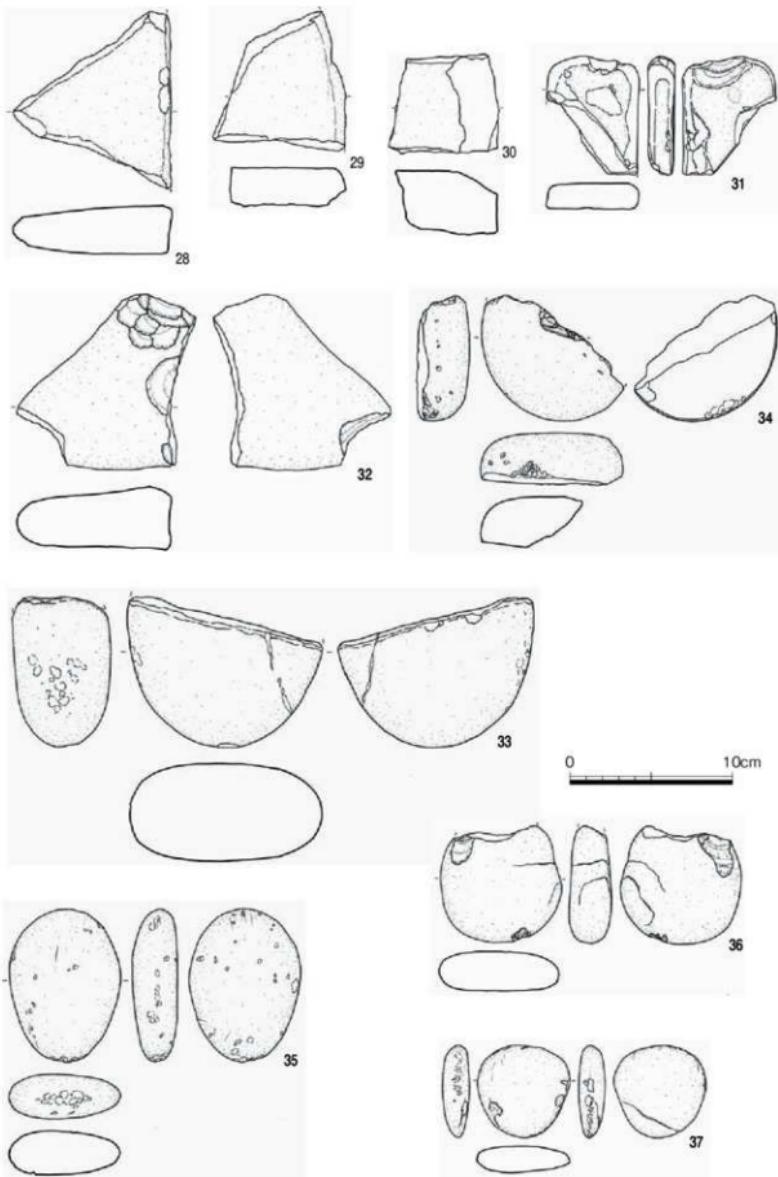
第18図 出土石器実測図③ (S = 1/2)



第19図 出土石器実測図④ (S = 1/2)



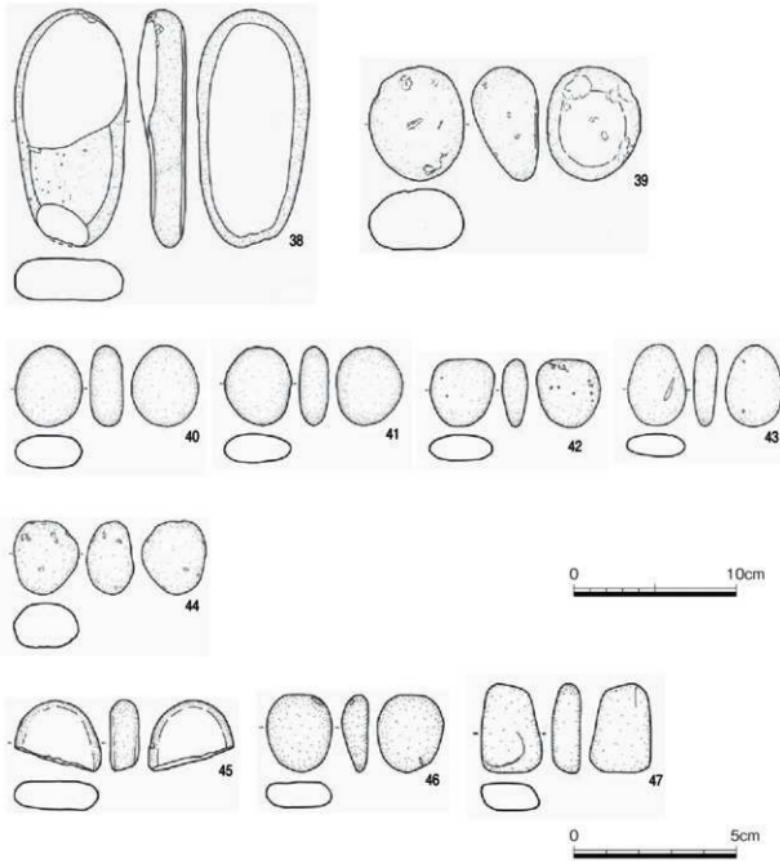
第20図 出土石器実測図⑤ ($S = 1/3$)



第21図 出土石器実測図⑥ (S = 1 / 3)

離が認められる。37は周縁に潰痕が巡り、線条痕も観察される。

38~47は磨石である。38、43、45は砂岩製、40・41は安山岩製、39・44はデイサイト製、46・47は頁岩製である。38は扁平で細長の円盤で、表裏面に滑面を有する。39は扁球形状で、平坦面を一面もつ。43は非常に精緻な砂岩で、全体が滑面に覆われる。44は扁球状をなしている。45~47は3cm以下の小型品である。



第22図 出土石器実測図⑦ (38~44 : S = 1/3, 45~47 : S = 2/3)

第4表 出土石器観察表

回	番号	器種	石材	グリッド	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
16	1	石核	サヌカイト	P10	IV層	3.7	5.4	3.0	56.4	
	2	石核	黒曜石	AD3	IV層	2.1	2.4	2.5	7.9	
	3	石鏨	黒曜石	O 9	III層	2.6	1.7	0.3	0.7	
	4	石鏨	サヌカイト	北部オクラン	造成土	2.8	1.7	0.4	1.8	
	5	石鏨未成品	サヌカイト	S 8	V層	2.6	2.8	0.3	2.6	
	6	微細剥離片	黒曜石	K11	III層	4.2	1.4	0.5	1.8	
	7	ノミ形石器	頁岩	S 8	V層	3.6	1.5	0.5	3.2	
	8	磨製石斧	蛇紋岩	E12	IV層	9.1	5.8	1.8	135.6	刃こぼれあり
17	9	打製石斧	安山岩	G13	IV層	20.2	10.2	1.3	331.8	
	10	打製石斧	安山岩	G13	IV層	17.3	7.9	2.0	284.4	
18	11	打製石斧	安山岩	AE 3	IV層	10.2	4.7	1.7	103.3	
	12	打製石斧	安山岩	M11	IV層	6.4	5.2	1.0	53.9	
	13	打製石斧	安山岩	E13	III層	6.5	6.6	2.2	130.4	
19	14	石鍤	安山岩	AD 3	III層	9.3	8.3	2.0	201.4	
	15	石鍤	安山岩	O 9	III層	7.7	8.3	2.5	198.0	
	16	石鍤	砂岩	K11	III層	8.2	6.9	2.4	206.2	
20	17	石鍤	砂岩	L11	IV層	8.8	7.5	1.9	149.3	
	18	石鍤	デイサイト	J12	IV層	7.2	6.6	2.3	161.7	
	19	石鍤	安山岩	U 7	IV層	8.6	6.3	1.7	144.9	
21	20	石鍤	デイサイト	V 7	IV層	5.1	6.0	2.5	101.3	
	21	石皿・台石	砂岩	F13	IV層	20.8	16.7	4.7	2382.0	
	22	台石	安山岩	O10	IV層	10.3	13.9	5.0	794.0	
22	23	台石	安山岩	AA 4	III層	8.1	12.0	7.5	1117.5	
	24	台石	安山岩	X 6	IV層	12.8	11.8	3.9	772.0	
	25	台石	安山岩	F13	IV層	13.1	8.9	5.4	935.0	
23	26	砥石	砂岩	R 8	V層	15.0	12.6	5.3	1440.0	
	27	砥石	砂岩	R 9	IV層	11.0	9.7	2.9	357.0	
	28	砥石	砂岩	AD 3	III層	11.0	10.7	4.2	612.0	
24	29	砥石	砂岩	K11	IV層	8.6	8.1	2.3	239.0	
	30	砥石	砂岩	S 8	V層	6.1	6.2	3.8	238.0	
	31	砥石	砂岩	—	カクラン	7.2	5.7	1.7	86.4	
25	32	叩石	砂岩	J11	IV層	10.8	10.8	3.9	503.0	
	33	磨石・叩石	砂岩	AC 3	III層	9.2	12.0	6.0	882.0	
	34	磨石・叩石	砂岩	V 7	IV層	7.7	8.8	3.1	238.3	
26	35	叩石	安山岩	H12	IV層	9.4	6.8	2.8	228.7	側条痕あり
	36	叩石	砂岩	N10	IV層	7.2	7.4	2.5	207.2	
	37	叩石	砂岩	J11	IV層	5.6	5.7	1.7	65.0	側条痕あり
27	38	磨石	砂岩	F13	IV層	14.6	6.8	3.0	406.5	
	39	磨石	デイサイト	O10	IV層	7.1	5.8	4.1	153.3	
	40	磨石	安山岩	AC 4	IV層	5.0	4.1	2.0	47.9	
	41	磨石	安山岩	U 7	IV層	4.8	4.1	1.8	40.2	
	42	磨石	砂岩	AD 3	IV層	4.1	3.9	1.6	35.8	
	43	磨石	砂岩	H12	IV層	5.0	3.5	1.4	32.4	
	44	磨石	デイサイト	M11	IV層	4.5	4.0	2.7	53.0	
	45	磨石	砂岩	V 7	IV層	2.2	2.6	0.9	6.1	
	46	磨石	頁岩	S 8	V層	2.4	2.0	0.8	4.8	
	47	磨石	頁岩	H12	IV層	2.7	1.9	0.9	7.1	

第IV章 まとめ

大崎鼻遺跡においては、平成12・14年度の大崎鼻自然公園整備事業に伴って現在のこんびら公園部分で発掘調査が行われた履歴があり、遺跡北東部の様相が判明している。縄文時代早期と縄文時代晚期の二つのまとまった時期の遺物が出土しており、縄文時代早期は円筒形貝殻条痕文土器と押型文土器、縄文時代晚期は黒川式（礫石原式）のもので構成されている。

今回の調査は、島原鉄道跡地の再活用ということで遺跡のほぼ中央を自転車歩行者専用道路が縦断する計画となっていたため、遺跡の中央部から南部にかけて帶状に調査を実施した。平成12・14年度の調査とあわせて、遺跡を南北に貫くように遺跡の情報を得ることができたため、遺跡全体の時間的・空間的様相が明らかとなってきた。

遺構としては、IV層上面で多数の溝が検出され、おそらく中世期に属するものと考えられるが、この時期に広範囲に積極的な土地利用が行われていた状況が新たに判明した。また、遺物としては、縄文時代早期、縄文時代後期、縄文時代晚期、弥生時代中期、古墳時代、中世のものがみられ、現在に至るまで断続的にはあるが、縄文時代早期以降生活の場として長期にわたり利用されてきたことがうかがわれる。過去の調査で多数の出土をみた縄文時代早期の資料については、今回の調査では押型文土器が数点検出されたのみで円筒形条痕文土器は皆無であり、極めて少ない状況であった。縄文時代早期の遺跡の展開は遺跡の北部、こんびら公園付近に限定されることが判明した。

石器組成の面からみてみると、大型で扁平なもの、撥形のもの、あるいは突き棒状の形状の打製石斧があり、またごく小さいサイズの原石を素材としたであろう黒曜石石核も出土している。こうした石器類の存在は、縄文時代晚期の特徴を反映しているものと考える。砥石や磨石・叩石類のあり方も、例えば同じく島原半島東部の縄文時代後・晚期から突帯文期にかけての遺物が大量に出土した権現脇遺跡などと比較しても大きな差はないようみえる。

一方、目を引くのが石鍤の内容である。7点の出土をみたが、石器の全体の構成のなかでは高い出土数といえる。大崎鼻遺跡は、北縁から東縁にかけてが断層活動によって形成された高低差10mほどの崖面になっており、そこを下りればすぐに有明海へと出ることが可能な臨海遺跡である。また、断層活動によって大きく湾入した遺跡北西の入江は干潟地帯も形成している。断層地形の形成過程において大崎鼻遺跡の縄文期の状況がどうであったかについては検討の余地があろうが、こうした地形的特質は、海底地形やそれが及ぼす潮流への影響も含め、大崎鼻遺跡の北から東に広がる有明海の海岸部を干潟地帯、疊浜地帯とともに良好な漁場となしえたはずである。少なくとも縄文時代晚期の大崎鼻遺跡では、生業として採集・漁労活動が一定のウエイトを占めていたものと考える。

それから石鍤をはじめデイサイトを石器石材として比較的多用する傾向がみられることにも着目しておきたい。デイサイトは地元雲仙火山産出の溶岩であり、島原半島東部であれば場所を選ばず容易に入手可能な石材である。ただ先史時代の石器石材ということをいえば、利用頻度は非常に低い。斑状組織をもつデイサイトの粗い岩質とそれによる加工性の乏しさによるものと推測する。大崎鼻遺跡の場合、堆積土中、あるいは山城から海岸までの距離の短い小河川域での採取ではなく、海岸で潮流に洗われた円礫・亜円礫のレベルまで水磨を受けた原石を採集することが可能であったものと推察され、デイサイトが嵌入石材としての砂岩や安山岩の円礫を補完する存在になりえたものと考える。これは遺跡の周辺が疊浜海岸であるという、島原半島東部の遠浅の砂浜海岸や干潟地帯の多い島原半島東部のなかでは断層地形にかかわる地理的には特異な部分を反映しているものと思われ、大崎鼻遺跡の性格を特徴づけているといえる。

[参考文献]

- 土橋啓介編 2001 「大崎鼻遺跡」 布津町文化財調査報告書第1集 布津町教育委員会
本多 和典 2022 「大崎鼻遺跡」 南島原市文化財調査報告書第29集 南島原市教育委員会

図 版



航空写真①

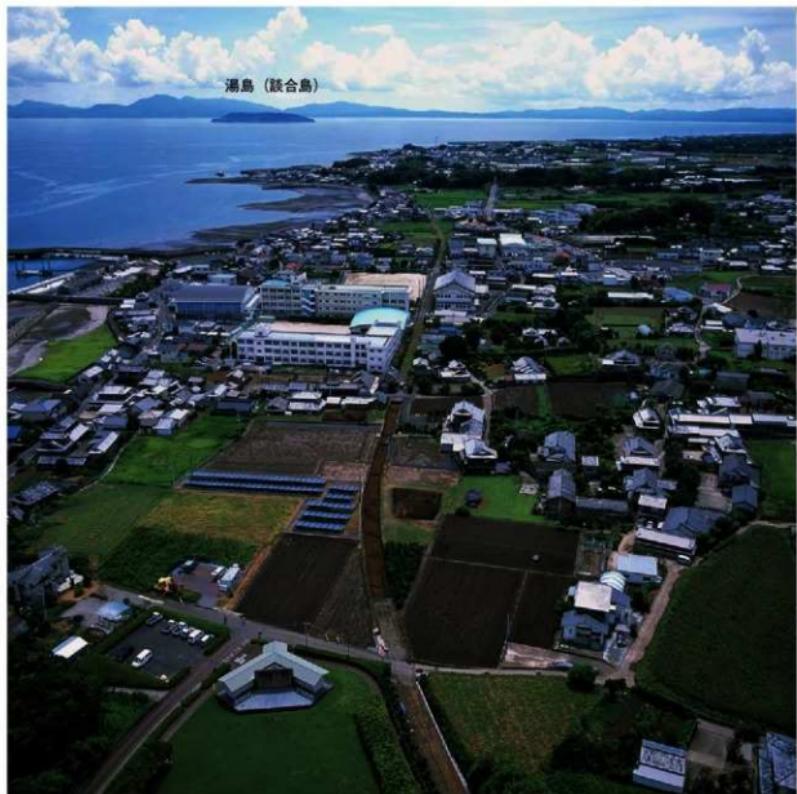


航空写真②



航空写真③

図版 4



航空写真④



航空写真⑤

図版 6



TP. 1 南壁



TP. 2 南壁



TP. 3 南壁



TP. 3 溝検出状況（北から）



TP. 4 南壁



TP. 4 溝検出状況（北から）



TP. 5 南壁



表土剥ぎ

範囲確認調査



東壁（北から）



東壁（北から）
本調査区土層堆積状況①

図版 8



東壁（西から）



東壁（北から）
本調査区土層堆積状況②



北半部（北から）



南半部（北から）

本調査区IV層上面遺構検出状況①



北半部（南から）



南半部（南から）

本調査区IV層上面遺構検出状況②



溝1（東から）



溝2（南から）



溝3（南から）



溝4（南から）



溝6（左）・溝5（右）（南から）



溝8（左）・溝7（右）（東から）



溝9（東から）



溝10（東から）

本調査区IV層上面溝検出状況①

図版12



溝11（南東から）



溝12（東から）



溝13（南から）

本調査区IV層上面溝検出状況②



溝3断面（南東から）



溝2断面（南から）



溝3断面（南東から）



溝4断面（南から）



溝5断面（南から）



溝6断面（南から）



溝6・溝5断面（南から）



溝7断面（南から）

本調査区Ⅳ層上面検出溝堆積状況①

図版14



溝9断面（北東から）



溝10断面（東から）



溝11断面（東から）



溝12断面（東から）



溝13断面（南東から）

本調査区IV層上面検出溝堆積状況②



出土土器ほか①

図版16



出土土器ほか②



出土土器ほか③

図版18



出土土器ほか④



出土土器ほか⑤



1



2



3



4



6



5

出土石器①



7



8

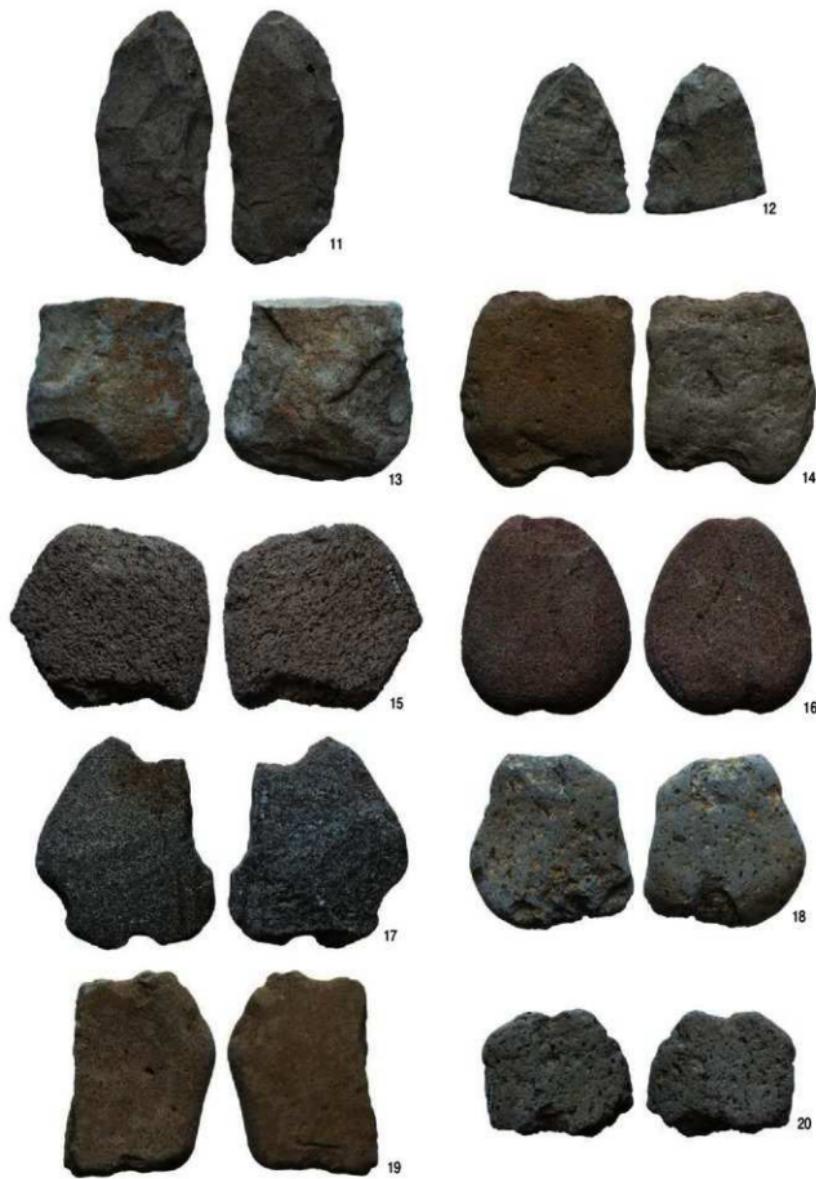


10

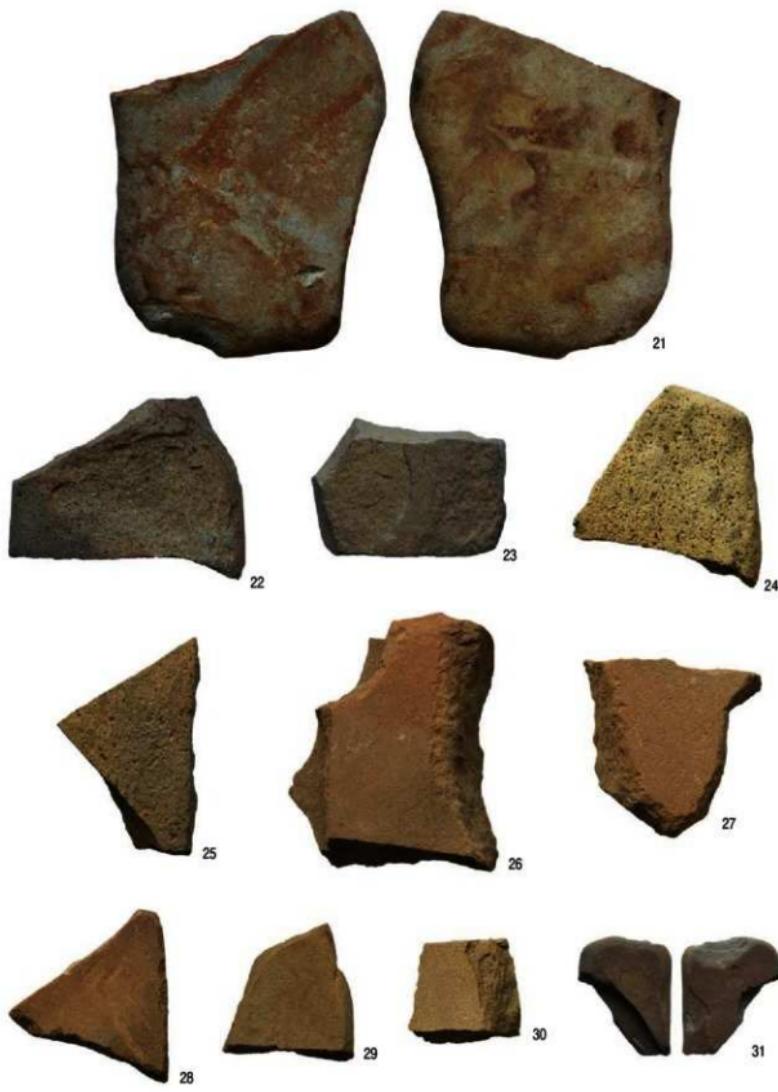


9

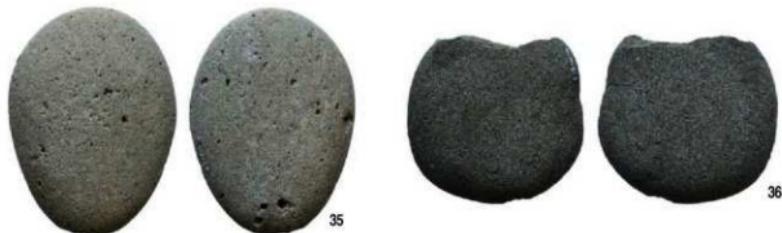
出土石器②



出土石器③



出土石器④



出土石器⑤



出土石器⑥



夏の大崎鼻遺跡にて

報告書抄録

ふりがな	おおさきばないせき							
書名	大崎鼻遺跡							
副書名	市道南島原自転車道線整備工事に伴う発掘調査							
卷次								
シリーズ名	南島原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第33集							
編著者名	本多 和典							
編集機関	南島原市教育委員会							
所在地	〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地 TEL0957-73-6705							
発行年月日	西暦2023年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯 °'\"	東經 °'\"	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおさきばないせき 大崎鼻遺跡	みなみしまらし 南島原市 ふつちう 布津町	42214	120	32° 41' 37"	130° 21' 21"	20220416 ~ 20220812	590m ²	道路整備
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大崎鼻遺跡	遺物包含地	縄文時代 弥生時代 中世	溝 ピット	押型文土器 粗製土器 精製土器 弥生土器 打製石斧 石錘				

南島原市文化財調査報告書 第33集

大崎鼻遺跡

2023.3.31

発行 長崎県南島原市教育委員会
〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地

印刷 株式会社 昭和堂